
画面の中を漂う天使

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

画面の中を漂う天使

【Nコード】

N3229J

【作者名】

鈴

【あらすじ】

パソコンのカメラ越しで見知らぬ異性とコミュニケーションする仕事ーチャットレディーをしている23歳の空良は同棲している彼からDVを受けていた。身体的にも心も傷ついている空良に訪れた運命的な出会いとは・・・？

ブログ

あなたはチャットレディという職業を知っていますか？

パソコンのカメラ越しで見知らぬ異性とコミュニケーションする仕事――

現実の私は生きてるのか死んでるのかわからないくらいの小さな存在だったけど、

パソコンの中では輝く天使になれた。

パソコンの中では、みんな私を見てくれたし、私を必要としてくれた。

それが私の裸を見たいという理由でも、

私の自慰する行為が見たいという理由でも・・・

それでも良かった・・・

私のパソコンの外に待っている現実はとっても孤独でつらいものだったから。

だけど時々すごく空しくて、寂しくなるんだ。

泣きたくなってしまうんだ・・・

私

鏡の中の私。

冴えない顔。

幸薄そうな暗い顔。

23歳のこれが私・・・

思わず深いため息をついてしまう。

ますます暗い顔に磨きがかかった。

森下空良。23歳。

体型も普通、

顔も普通。

ため息をつきながら、洗面台の戸棚からメイク道具を取り出す。

面倒くさいけど、化粧を始める。

ファンデをのばして、眉毛を書く。

マスカラはたつぷりめにのせる。

アイシャドーの色を何色も重ねる。

チークをポンポンと頬の上に乗せる。

そして仕上げに唇にはたつぷりのグロス。

これで私は輝く想像世界での扉を開ける。

いかにも不幸そうな顔がポツと明るくなった。

そして私は無機質な箱、パソコン前へ座る。

マウスをクリックして開いたのは、

「チャット ラブ エンジェル」

ピンクの背景色が何だか目をチカチカさせるサイト。
全体に淫靡なムードが漂ってる。

ただどこかが現実の私を忘れさせてくれる場所。

そして私の仕事場――

チャットレディー

私はこのサイトで、チャットレディーのバイトをしている。

チャットレディーはパソコンに取り付けたカメラを通して、見知らぬ男性とコミュニケーションする仕事。

普通にお話したりはもちろん、もっと過激な事を要求されたりもする。

例えば裸になったり、一人Hをしたり・・・

でも実際に男性と接する訳ではないから、人間嫌いな私にはすごく気楽な仕事だ。

仕事でのハンドルネーム（キャバクラでの源氏名と同じようなものだ）は、

「くう」

空虚の「くう」だ。

だって私には何もない・・・

私にぴったりのハンドルネームだと思う。

ログインしたら、早速仕事開始だ。

しばらく待機していると、私の待機画像を見て気に入ってくれたどこかの誰かがチャット指名してくれる。

今日もニコニコ作り笑いを浮かべながら待機していると、

ピロリン♪

軽快な誰かの入室を知らせるチャイム音。

誰かが私のチャットルームに来たようだ。

「こんばんわ〜」

チャットといっても、私はキーボードではなくマイクでやっている
ので、相手もマイクで話してくれる事が多い。

キーボードは打つのが大変だし、私はマイク派。

でもやっぱりこのバイトってテレビテレクラだなあ・・・っていつ
も思う。

「くうちゃん、こんばんわ、すごくかわいい子だから思わず入っち
やっ たよ〜」

「あは。ちょ〜うれい！ありがとうございますう」

私は最高の作り笑いを浮かべる。
声はいつもより数オクターブ高い。

「くうちゃんは顔もすごいかわいいけど、体はもっとかわいい感じ
だよね（笑）」

・・・きた、きた。

やっぱり男の人っていつもこういう話の流れ。

「あは。どおだろ？？」

「くうちゃん、体つきがエッチそうだもんね」

「そんなことないって。やだ」

「ええ〜嘘〜。おじさん、くうちゃんの素敵な姿見たいな」

「素敵な姿ってえ？」

「わかってるくせに！生まれたままの姿だよ」

「恥ずかしいなあ・・・じゃ、もう少しお話してえ、仲良くなった
ら、私恥ずかしいけど・・・見せちゃおうかな」

私は結局1時間後に、この見知らぬおじさんに裸を見せたんだ。

彼氏

見知らぬおじさんとチャットして疲れた私はため息をついて、パタ
ンとノートパソコンを閉じた。

「今日は5000円・・・」

チャットレディーはチャットした分だけお金になる。
完全歩合制みたいなもんだ。

だから長くチャットした方が多くお金を稼げる。
なるべく話を長引かせるのが、多く稼ぐコツなのだ。

その時、ボタンと玄関ドアが開く音がした。
ビクッと反射的に私の体が震える。

「帰ったぞ・・・」

いつもの無愛想な男の声。

「タカ、おかえり」

私は小さな声でつぶやく。

その瞬間、タカの顔が歪んで、私は再びビクッとする。

「おめえは相変わらず暗いなあ！帰ってきたときくらいかわいく迎
えらんねえのかよ！！」

タカは、私の頬を思いつきり殴った。
その衝撃で思いつきり壁にぶつかる。

「おめえのその顔見るとむしゃくしゃすんだよ！」

倒れている私の太ももに思いっきり蹴りが入る。

痛さに思わず顔が歪む。

「何だあ！その面はよお！イラつかせんじゃねえよ！」

とうとうタカを本格的に怒らせてしまった。

それから私の体のあちこちにタカのパンチや蹴りが飛ぶ。

私はとにかく丸くなって身体をかばいながら、タカの怒りが消えるのを待つしかない。

「気分悪い！出てくる！金よこせ！」

手を差し出してくるタカに逆らえるはずもなく、私は力なく1万円札を2枚彼の手の上に乗せた。

「しけてやがんな」

舌打ちをしつつ、1万円札をくしゃっとジーンズのポケットにつっこむと、タカは家から出ていった。

「痛っ・・・」

私はしばらく痛さで起き上がれない。
そのまま倒れているしかなかった。

これが私の現実。

毎日これが繰り返されている。

出会いとDVの始まり

私とタカとの出会いは4年前の私が19歳の時だった。

何のあてもなく1人で街をぶらついていて私に声をかけてきたのがタカだった。

寒い1月の晴れた日だった。

「暇そうだね。寒いし何か食いに行こう」

背後から声がした。

振り返ると金髪のいかにもチャライ男。

でもその男を私は無視できなかった。

その男の目だったんだと思う。

なぜかわからないけど、目が離せない。無視できなかった。

一目ぼれとかじゃない。

それは不思議な感覚だった。

そんな出会いから、何となく毎日一緒にいるようになって、一緒に住むようになった。

甘いだけのおままごとみたいな毎日。

でもすごく楽しかった。

幸せだった。

でもそんな日は長く続かなかった。

元々フリーターで働く事が大嫌いなタカ。

決まった仕事もすぐ辞めてしまっ。

同棲する前に決めた諸費用は全て折半という約束も段々破られるようになった。

会社を辞めたのが5社目になった頃、私はとうとう爆発した。

「ねえ、タカ、一体どういいうつもり!？」

マンガを読んでいたタカがだるそうに顔を上げる。

「何がだよ?いきなりでかい声出すなよ。ビックリすんだろ」

「何がじゃないよ!もう会社辞めたの5社目じゃん。何で3ヶ月も続かず辞めるわけ??」

「だって仕方ないじゃん。何か俺に合わないんだもん」

「みんな合わないと思っても生活の為に働くもんでしょ??私だってラブホテルの清掃のバイトなんてやりたくもないし、自分に合ってるなんて思ってないよ。でも生活の為にやってるんでしょ」

「お前は我慢できるかもしれないけど、俺は無理」

そう言っ、タカは又マンガに視線を落とす。

「ちょっと!ふざけないでよ!生活費折半って約束だったじゃん!何で私がタカを食べさせないといけないわけ??それじゃヒモと一

緒じゃん!!」

思わず出た言葉だった。

でもその瞬間タカはすごい形相で私を見た。

「・・・ふざけんな」

タカはすつと立ち上がったと思ったら、私の頬にすごい衝撃が走った。

殴られたと気づくまでに数秒かった。

「てめえ、なめんじゃねえよ!」

その言葉を筆頭に私は思いつきりタカにボコボコにされた。全身殴られ、蹴られた。

体中にアザができたし、目の回りも青アザ、頬も腫れて、しばらく外出ができなかった。

その日からタカは豹変した。

毎日のように私を殴るようになった。

私は黙って殴られるしかなかった。

私のラブホテルの清掃のバイト代金も平気で全額持ち出し、パチンコにはまるようになった。

お金がなくなると、消費者金融から借金もするようになった。

私はラブホテルの清掃のバイトの他に、バイトを2つも増やした。そのバイトの合間にチャットレディも始めた。

毎日殴られ、そして働きっぱなしで、まさに私の現実 は 地獄 になっ

た
の
だ。

私の過去

別れよう、家を出ようって何度も思った。

実際荷物をボストンバックに全部つめたこともある。

だけど結局私はこのうちを出てはいけない。

タカから離れることができない。

だって私には帰れる場所がない。

いつでも戻れる実家なんてないのだ。

私が4歳の時に、父が病気で亡くなった。

母は誰かに寄りかからないと生きていけない人で、私が6歳の時に再婚した。

再婚相手は母より10歳も若い25歳の男だった。

男は優しくだったが、私が10歳を過ぎてから、やたらと私と一緒に風呂に入りたがったり、母のいない瞬間を狙っては体に触ってくるようになった。

そんな男の行動に母は気づいていたんだろうと思う。
私にその頃からすぐきつくあたるようになった。

母は女の顔になっていた。

私に嫉妬していたんだろうと思う。

しかし私が12歳の頃に思いがけず母は妊娠した。

私に弟ができた。

弟ができてからは義父は私の体に触ってくることは一切なくなつたが、同時に私には一切関心を示さなくなった。

それと同時に母も弟に夢中だった。

義父の関心なんていらなかったが、母からも関心を持たれなくなったのはつらかった。

母の私を見る目は私を「邪魔者」と言っていた。

そんな家には私の居場所はどこにもなくて、私は中学を卒業するとすぐ家出同然に家を出た。

それから年をごまかして、住み込みのバイト、時には男に体を売りながら、何とか今までやってきたのだ。

私はずっと一人だった。

こんな過去のせいで、人間不信になっていた。

恋人はおろか友達の一人もできなかった。

反対に私は人と関わらないようにしていた。

でも私はサイボーグじゃない。人間なんだ。
やっぱり一人は寂しい、悲しい・・・

そんな時にタカに出会った。

タカの目に惹きつけられた。

タカの目は私の目にそっくりだったんだ。

すごく孤独な暗い光を持っている目。

タカも私にそっくりな目をしているのは当たり前だった。

タカは2歳の時に両親から捨てられ、それからずっと児童養護施設

で育つたらしい。

そこでは先生による差別、同じ子どもによるいじめなど、心安らげる時はなかったとよく言っていた。

でも何よりつらかったのが、年に1回は必ず他の子どもの両親は養護施設に会いにくるのに、タカの両親はタカに1回も会いに来なかったことだそうだ。

私はタカの気持ちがよくわかる。

タカも私も親に裏切られた。

今も2人はそのトラウマから抜け出せずにいるんだ。
似たもの同士。

だから私はタカにどんなに殴られても、蹴られても、ボコボコにされても、お金を全部むしり取られても、タカと別れる事ができない。
タカを見捨てることはできない。

だってタカが私の唯一の家族だから。
私の分身だから・・・

出会い1

「いててて・・・」

身体の鈍い痛みで目が覚めた。

タ力から思いっきり殴られた後、そのまま寝てしまったらしい。

痛む全身をかばうようにして立ち上がり、洗面所へ行く。

鏡を見てみると、やっぱり昨日タ力に殴られたり蹴られたりしたところがドス黒くアザになってしまっていた。

右目の周りなんか真っ黒くてまるでパンダだのようだ。

タ力は朝になつても帰ってきていなかった。

たぶん又朝からスロットに行ってるんだろう。

今日も夜まで帰って来ない。

私はため息をついて、化粧を始める。

今日はホテルの清掃のバイトは休みだ。

だから昼からチャットレディーのバイトに入れる。

タ力のいない時間がチャンス。

いっぱい稼がないと、私たちは生活していけないもの。

私は全身のアザをどうにかコンシーラーとファンデで目立たなくするよに隠した。

体とほっぺのアザはあまり目立たなくなっただけ、目の周りの濃いアザだけは何度コンシーラーを重ねても、全く薄くならない。

「あーあ、もっとも目立つところが消えないなんて、今日はバイトできないよ・・・」

私はもう全て投げ出したくなってその場に寝転んだ。

だけど別に私の目の周りにアザがあっても、どうせチャットのお客さんには関係ないだろうと思いなおす。

だってお客さんは私のおっぱいや下半身にしか興味がないんだもん。私の顔や心なんてどんなだって関係ないし、関心もないだろう。

そう思ったら、やっぱり仕事をする気になって、私はノロノロ起き上がってパソコンに向かった。

ノロノロと私はパソコンを操作して、「チャット ラブ エンジェル」に接続する。

ログインして、待機を始める。

いつもは現実の暗い私を忘れられるから、チャットに入ると高揚した気持ちなのに、今日は目の周りのアザのせいで何だか暗い気分。やる気がちつとも出ない。

そのせいかいつもは5分くらい待機するとすぐお客さんが来るのに、今日は10分待っても30分待ってもお客は来なかった。

「やっぱり、このアザはひくよなあ・・・」

独り言をつぶやいて、今日はもう仕事にならないと諦めようとした時に、

♪ピロリン~~~~♪

お客の入室を知らせるチャイム音が鳴った。

「こんにちわあ」

私はいつもより10オクターブは高いぶりっこ声で挨拶をする。ただど音声で挨拶は返って来ず、しばらくするとパソコンの黒い画

面に

air>くうちゃん、こんにちは。

と文字が表示された。

airはお客のハンドルネームらしい。

「マイクはないの?。」

air>ううん。あるんだけど、俺すげーあがるから。タイピングでチャットやらせてもらっていい?。

チャットではマイクを使うお客が多いので、私はキーボードチャットはほとんど経験がない。
ちよつと私は戸惑った。

「もちろんいいよ。じゃあ、私もキーボードで打ったほうがいいのかな?。」

air>ううん。くうちゃんはマイクでしゃべって。くうちゃんの声聞きたいんだ。

何だか変わった客だ。

マイクがあるのにマイクを使わない。

しかも自分はキーボード、私はマイク。

何だか奇妙なチャットだ。

「あは。もちろん、私はマイクでOKだよ。私はキーボード打つの遅いし。」

a i r > ありがとう。

「a i r さんは何歳ですか??」

a i r > 俺は君から見たら親父かもしれない。親父じゃダメかな??

「ええ〜、何歳??」

a i r > 30 歳

「全然親父じゃないじゃん〜」

正直親父と言われて、50歳くらいかと思った。
ここのチャットにはだいたい30代後半から50代の客が多い。

20代や30代の人ほとんど私はチャットしたことがない。
でも年齢が違ってもどうせ男なんてH目的しかないんだろうけど。

出会い2

a i r > じゃ30歳の俺でも大丈夫??

「もちろんだよ」

a i r > 良かったよ。

「じゃ、改めて始めまして！くうです。チャットで話すの初めてだよね」今日はよろしくです」

a i r > うん、よろしく。でもね、俺くうちゃんの事、知ってたよ。いつもすごい人気で待機して5分もしないうちにすぐ入室中になっちゃうもんね。

私はこう見えてもチャットトレーダーの人気ランキングの3位なんだ。

「そっか」ありがと」

a i r > 今日はなかなかくうちゃんが入室中にならないから思い切っ
って入室してみたんだ。

私は黙って笑う。

今日なかなか誰もチャットに来なかったのは、やっぱり私の目の周りのアザのせいなんだろうか。

air>くうちゃんさ、チャット始まったばかりでいきなりかもしれないけど、その目の周りのってさ、アザだよね・・・??

直球の質問に私は一瞬息をすることを忘れた。
ただとすぐに作り笑いを浮かべる。

「あはは。わかる？実はぼくくとしててさ、ぶつけちゃったのよくく。バカだよねくくアハハ」

私は咄嗟にごまかした。

それからairさんからの返事は途絶えた。

1分以上もお互い沈黙のままだった。

私が次の一言を発しようとしたとき、

air>ごめん。正直にこのさいぶっちゃけるけど、くうちゃんが他の客とチャットしてるとこ、時々覗いてた。

このサイトにはチャットレディーとお客様が2ショットでチャットするというのが基本なんだけど、お客様は「覗き」というシステムを

利用すると、その2ショットのチャットをのぞく事ができるんだ。
つまり他のお客との会話やそのお客の前で擬似SEXしたら、「覗
き」を使ってる人は覗くことができるってことなのだ。

出会い3

「あはは、そつかあ。じゃ、私の恥ずかしいところとか、もしかしてヌードとかんも見ちゃったのかな?？」

air>・・・っていうか、正直そういうことよりすごく気になったことがあってさ。だから今日思いきってくうちゃんのチャットに入っただよ。

「・・・・・・・・え・・・何・・・??」

正直触れられないことに触れられそうな予感がした。

air>何か体のあちこちにアザみたいなのが見るたびに違う箇所についててさ。しかも数も増えてるみたいなのがするし。くうちゃんは隠そうとメイクしてたみたいけど。

「嫌だ~~~~!!何か変な誤解とかもかしてしちゃってる??さっき言ったじゃん。私すごいドジなんだよ。しょっちゅうぶつたり転んだりするんだよ」

air>・・・でもさ。ウエストらへんってどう考えても、あまり物にぶつからないでしょ??ぶつけてもあんなに濃いアザにはなら

ないと思う。

airさんはパソコンのキーボードをうつのが、相当早いらしく、真つ黒の画面にどんどん白い文字が浮き上がってくる。その文字を目で追うたびに、私は寒気を感じる。

「それで何が言いたいわけ？」

air>うん。はつきり言うと、DVじゃないのになって思ってる・
・くうちゃん是谁かからDVを受けてるんじゃないの？

「・・・」

私は黙るしかなかった。

air>やっぱりそうなんだね。黙ってるってことは図星ってことだよね？？

「・・・」

air>どうにしろ、ちょっとそのアザはひどいと思うよ。初めて

話す俺が口出す事じゃないかもしれないけど。

「うるさい・・・」

思わずボソツつぶやくように言葉が出た。

「DVだから何?? a i rさんに何か関係あるの??」

a i r>確かに。関係ないかもしれない。

「関係ないなら触れてほしくない事に触れないで!」

一度言葉を発したら止まらなくなっていた。

頭に血が登って、怒りが収まらない。

怒りをa i rさんにぶつけるしかない。

私は強制的にログアウトした。

自分からチャット中にログアウトをしたのは初めてだった。

でもこれ以上この件に触れて欲しくなかったし、チャットをする気力もなくなっていた。

やっぱり今日はログインするべきじゃなかったなあ・・・って、私はため息をついた。

これが私とairさんの出会だった。
最悪な出会いだった。

開く心1

最悪なチャットから1晩明けて、朝になった。

私は何となく眠れずにぼーっとしていた。

そんな私が勘に触ったのか、朝帰りしたタカに又殴られた。

今日は昨日よりは殴られなかったけど、又脚に濃いアザが仲間入りした。

段々殴られたりすることに慣れてきているというか、何も感じなくなっている自分が時々怖くなる。

このまま何も感じずにタカに殴られて死んでしまっんじゃないか・
・って時々不安になるんだ。

私はノロノロと立ち上がった。

今日の昼間はラブホの清掃のバイトが入っている。

カップルが交わってシートが乱れた部屋の後始末をする。

ラブホにきているカップルはみんな幸せなのだろうか・・・？

ゴミ箱に捨てられた避妊具を、大きなビニール袋に放りこみながら、私は機械のように何も考えないようにして手だけを動かす。

ラブホテルの清掃のバイトを終えて家に帰ると、時計は8時をさしていた。

やっぱりタカは家にはまだ帰ってきていなかった。

タカが家に帰ってきていないと、ホッとする自分がいる。

半日人がいなかった部屋は何だかすごく寒い。

私はそんな部屋で晩御飯のカップラーメンをすすった。

ラーメンを食べ終わってしまうと私は何だか落ち着かなくなった。

今日はチャットにログインするか？

私は心の中でかなり迷っていた。

昨日の触れられたくないところに触れられてしまったチャットがまだ心にひっかかっていた。

もしかして今日もairさんが入室してきたらどうしよう？？

何か今日もチャットしたら、もっと私の深いところにまで触れられてしまいそうだ。

私は小さいため息をついて、自分の財布をカバンから取り出す。

中身を見て、深いため息。

お札はなし、小銭少々・・・

又、今日タカに無理やりお金をぶん取られていた。

3万円以上入ってたのに、このざまだ。

やっぱり今日もチャットしないときつい・・・

明日からご飯が食べられない

昨日のairさんはたぶん来ないよね・・・

昨日のチャットでは私からログアウトしたし、思わず怒鳴ったし、結構きつい事も言った。

さすがに今日は私のチャットに入ってこないだろう。

若干不安だったけど、「お金のため！」と私はチャットにログインした。

開く心2

5分くらい待機すると、

♪ピロリン♪

私のチャットルームにお客が入ってきたチャイムの音がする。

笑顔で

「こんばんわあ」

と、言った瞬間、パソコンの黒い画面に浮き上がる白い文字。

a i r > こんばんわ。

笑顔が固まる。

a i r > 昨日はごめん。あやまりたかった。

「・・・いいですよ、別に。こちらこそ自分からログアウトしてしまつてすみませんでした。」

a i r > それは全然いいよ。こっちが悪かったんだしさ。

「・・・・・・・・」

それきり会話が途絶えた。

私はチャットをしたい気持ちは全然なかったし、airさんも何を話したらいいかわからなかったんだろうと思う。

長い沈黙が続く。

だけどこの長い沈黙に耐えられなくなったのは私だった。

「ねえ、airさん。私とチャットしてても面白く無いでしょ？さつきからずっと私全くしゃべってないし。airさんはお金を払って私とチャットしてるわけだから、こんなじゃつまらないし、お金ももつたいないよ。」

暗に――

チャットを止めたい。

チャットをairさんからログアウトしてくれと伝えたつもりだった。

air>俺は君と楽しいチャットをしようとは思ってないんだ。ごめん。黙ってるのは話したい内容を頭の中で整理してるからなんだ。

心臓がバクバクいいはじめた。
やっぱりairさんは私の深い現実の闇に踏み込んでくるつもりらしい。

開く心3

air>もうこの際だからはっきり聞くよ。DVは誰から受けてるの?? 彼氏? 親?

そのアザは尋常じゃないと思う。病院に行って診断書を書いてもらって、公的機関の相談施設や弁護士の所に行くべきだよ。

「うるさい!!!!!!」

弾けるように叫んでいた。

「もう本当にお願いだから放っておいて! 関係ないじゃない!」

air>俺は確かに関係ないな。でもさ、俺のパソコンの画面の中にいつもアザが増えてる女の子がいて、毎回君の姿を見てるたびに最悪な事態になるんじゃないかって思うと、心配でたまらないんだよ。

「うざい! もう口出ししないでよ!

お願い! もうチャットに来ないで!!! もう話したくないし、チャットもしたくない」

そこまで一気に言っで、私は下を向く。
唇を思わず噛み締めた。

a i r > わかった・

数分の沈黙の末に、a i rさんの打った文字が画面に表示された。

a i r > くうちゃんはもう俺とチャットも話もなくていいよ。でも、俺はくうちゃんのチャットルームに入るよ。俺が入っても何も言葉を話さなくてもいいし、チャットもしなくていいよ。

「・・・・・・・・！！」

何てめちゃくちな事を言う人だろう。

チャットは相手とチャットを開始した時間からお金が発生する。

私の場合は相手と1分チャットして60円。

ただどお客が払ってるお金は100円なんだ。

その間チャットもしないで話もしないでいいなんて、お金を捨てる

のと一緒にだ。

「何言ってるの？ a i rさんが私のチャットルームに入らなければ終わる話じゃない？ もう私の部屋に入ってこないで！」

a i r>それこそ君には関係ないよ。僕はもう決めたことだから。それじゃ、今日はここで落ちるよ。

又、明日。

そう言つて、 a i rさんが私のチャットルームから退室した。

何て人なんだろう・・・

本当に明日からずっと来るつもりなんだろうか？

開く心 4

次の日の夜。

宣言どおり、a i rさんは私のチャットルームに入ってきた。

a i r>こんばんわ。

挨拶してきても私は全く話もしなかったし、チャットもしなかった。ただカメラの前にいるだけ。

そのまま2時間、私は何もしないで7200円を得た。

a i rさんは何もしないで12000円を失った。

それからもa i rさんは毎日のように私のチャットルームに入ってきた。

私がログインすると、5分以内に必ずチャットルームに入ってくる。

そして挨拶だけすると、ずっと無言のまま。

a i rさんからは私の姿が見えているけど、私からa i rさんの姿は見えない。

何だか自分の姿だけが見られてると思うと息苦しかった。

a i rさんはどういう表情で私を見ているんだろ？

どうして毎日毎日私のチャットに入ってくるんだろ？

全くわからなかった。

開く心5

そんな事が10日続いた。

私は無言でカメラの前にいることが段々耐えられなくなってきた。
息苦しいし、気まずい。

そして今日もa i rさんは私がログインすると、すぐチャットルームに入ってきた。

a i r>こんばんわ。

いつものa i rさんの挨拶。

その文字を見た瞬間、私の頭にかあつと血が登った。

「ちょっといい加減にしてよ！まじで！！もう毎日毎日息苦しいんだよ！もう来ないでって言ってるでしょ！？」

私が誰かにこんなに感情をぶつけたのは始めてだったような気がする。

a i r > やつと話をしてくれたね。

「もう本当に迷惑なの!!」

a i r > わかってるよ。

「わかってるなら何で来るのよ! ストーカーみたいな事しないでよ」

私は感情をぶつけるのを止める事ができなかった。

a i r > くっちゃんは優しいし、真面目だね。

「・・・は・・・??」

a i r > どんな俺が迷惑でも絶対カメラに自分の姿をうつしていたでしょ? そんなに嫌だったら、普通はカメラに自分の姿をうつさないようにしたままチャットするよ。そうすれば何もしないで、お金が入るんだから。

確かに私はカメラに自分の姿をうつすことを止めなかった。
それが最低限のルールだと思ったから。

私は自分でも嫌になるくらいこついうところは融通がきかない。

air>ねえ、くうちゃん。正直迷惑なのはわかってる。自分でも
ストーリーみたいだなあって思うもん。嫌な思いさせてごめんな。

「・・・・・・・・」

急に素直に謝らないでよ・・・
調子が狂うじゃん・・・

air>今日でここに来るのは最後にするよ。だけど俺の話を今日
は最後まで聞いて欲しい。

私はうなずきも返事もしなかったけど、画面を黙って見つめた。

開く心6

a i r>俺がくうちゃんを初めて見たとき、すげえかわいい子だなあ・・・って思ったよ。正直ここのチャットに来たのは他の男と一緒にでエロ目的もあった。だからこんな子がエッチな事を・・・って、始めはそういうことしか頭になかった。言い訳させてもらうと、やっぱり俺も男だから。

「・・・・・・・・」

a i r>でも俺はチャットとかって初めてだし、すぐ緊張するから自分がチャットルームに入る勇氣はなかった。だから、くうちゃんが他の客とのチャットルームを覗いたんだ。

いつのまにか私はパソコンの画面上の文字を必死に追っていた。

a i r>ごめんね、そこでくうちゃんが脱いできるとこやエッチな事してるところも見た。でもね、そういうことより気になることができた・・・

「・・・・・・・・それが私のアザ？」

air>うん。始めはどこかにぶつけたのかな？とか思ってた。でも数が増えたり、ぶつけたとは思えないくらいのかい濃いアザが新しくできてたりで、これはぶつけたアザじゃないなあ・・・って思った。

私は何て答えていいのかわからなかった。
黙っている事しかできなかった。

air>そのうちね、体のアザと同時に、くうちゃん精神状態の事がすごく心配になったんだ。

「・・・精神状態？」

air>うん。何か君の笑顔はつらそうなんだ。すごく無理してるって感じで。

「・・・・・・・・」

air>その笑顔は“たすけて、たすけて”って言ってるように見えるんだ。

「・・・・・・・・！」

気づくと私の目から涙がボロボロ出ていた。

そうなんだ、私は現実から逃げ出したいのもあってチャットの世界に入った。

チャットの中でだけでも誰かに必要にされたくて、嫌われたくなくて、ずっと笑顔でいたんだ。

でも無理なんかしたくなかった。

本当は泣きたかった。

笑いたくなくなかなかつたんだ。

誰かに助けて欲しいとずっと思ってた！

開く心7

a i r > やっぱり何か君はつらい重い事を抱えてるみたいだね。そんな感じがした・・・

「・・・・・・・・」

a i r > 誰か身近に頼れる人はいないの？

私は黙って首を横に振る。
頼れる人なんて誰も私にはいない。

a i r > ごめんな。嫌な事聞いてしまって。

私は肯定も否定もしなかった。

a i r > 俺すげえしつこいし、くうちゃんも俺の事気持ち悪いって思ってるんだろうな。俺も自分の事何だかストーリーみたいだと思っ
って、ひそかにへこんだ。

「確かにストーカーみたいだね・・・」

air>だよな・・・でも最後にはつきり言わせて！女を殴る男、子どもを殴る親、自分より弱い人を殴る行為は最低だよ！強くなるんだよ！くうちゃん！！そこから逃げたり、助けを求めるのも立派な勇気だよ！！自分を大事にしてあげてよ。

逃げる・・・どこへ？

助けを求める・・・？誰に？

自分を大事にする・・・？何で？

airさんの言葉に私はわからなくなる。

air>ごめんな。一方的にいろいろ言っで。でも今日で最後だから。

「・・・最後？」

air>うん、もうくうちゃんのチャットルームには現れないよ。今まで嫌な想いをさせてごめん。だけど勇気を持って！強くなつて！！くうちゃん！！

「……………」

air>さようなら。元気で。

その言葉を最後にairさんはチャットルームから退室していった。

喪失感

それからa i rさんは私のチャットルームには姿を現さなくなった。

私は相変わらずお金の為にチャットトレーダーを続けている。

だけど以前のようにチャットにログインする事で、現実を忘れる事はできなくなってしまった。

チャットトレーダーの自分は本当の自分じゃない。

ただ現実から逃げているだけ・・・と思うと、チャットトレーダーの自分も嫌になってしまふのだ。

a i rさんに言われた事が頭から離れない。

『逃げるのも、助けを求めるのも勇気』

『強くなって』

言葉が鮮明に頭の中でぐるぐる回る。

だって勇気なんて持てない。

怖い。

助けなんて求められない。

誰に求めればいいのか？

強くなかなれない。

私の過去が全てを縛ろうとする。

タカはここ数日家には帰ってこなくなっていた。

帰ってこないほうがいいと思うのに、いつまでも別れられないでいる自分が又情けなくなる。

私は仕事中でも歩いてる時でもどんな時でもa i rさんの事が頭から離れなかった。

a i rさんの事がというより、a i rさんの言葉にいつていいかもしれない。

a i rさんに言われた一言一言がすごく心に残っている。

かつて私の事をここまで心配したり、いろいろ言ってくれる人はいなかった。

私にとって自分以外の人間、すなわち他人は、自分を傷つけるだけの存在だったんだ。

だけどa i rさんだけは違った。

顔も見たこともなし、声も聞いたこともない。

それなのにa i rさんは私の心の深い部分まで入ってきた。

私の苦しみを見抜いている。

何で私の心にこんな深い足跡を残したんだろう。

だけでもうそのa i rさんとはもう話したり、接する事もないんだろう・・・

もうa i rさんは私のチャットルームには姿を現さないって言ったんだから。

a i rさんがチャットルームに来ない限り、私たちは交わる事もない。

だって私はa i rさんの住所も電話番号もメルアド、本名ですらない。

そう考えるとなぜか私の心はチクチクするのだった。

何かとてつもない大事なものをどこかに置き忘れたような喪失感を感じる。

逃げる勇気1

airさんがチャットに来なくなつて1週間がたった。

私は相変わらずチャットレディを続けていた。

それは何よりもお金の為だったけど、心の奥では密かにairさんを待っている自分がいる。

午後9時。

晩御飯を簡単に済ませて、チャットで待機していると、ガチャ！

家のドアが開く音がした。

体がびくつと震える。

タカだ。

タカが帰ってきた！！

タカがこんな時間に帰ってくるのはかなり珍しい。

私は急いでパソコンの電源を切った。

そしてタカがいる玄関までパタパタ走っていく。

「おかえりなさい」

小さな声でつぶやくように言う。

数日間家に戻ってこなかったことに、私はあえて触れなかった。
そんな事を聞いてタ力を怒らせたなら、又私は殴られるから・・・

「・・・ああ」

タ力は靴を乱暴に脱ぐと、部屋に上がる。

私はチラリとタ力の顔を見る。

今日はそんなに機嫌が悪くないらしい。

少しほっとする。

でもここで油断してはいけない。

タ力はふとしたことですぐきれるから。

でもそのキレるポイントが私はまだ全然わからない。

逃げる勇気2

「ご飯は食べたの？」

「食ってきた」

「お風呂は？」

「後でいい。お前先入れ」

そっけなく言うと、タカは隣の部屋に行くために私の側をすれ違った。

その時、タカとすれ違った後から嗅いだことのない香水の匂いが辺り一面に広がった。

いかにも女の人が好みそうなセクシーな大人っぽい香りだった。

私は香水をつけない。

タカは香水をつけるけど、メンズのスパイシーな香りの香水をつける。

何でこんな香水の匂いが濃厚にするんだろう。

タカは満員電車には乗らないから、混雑した電車で香りがつくこともないだろう。

だいいち、ここまで満員電車で濃厚に香りがつくこともないだろう。

私はお風呂場に向かった。

確信する。

絶対浮気だ・・・

そうに決まってる。

数日家に帰ってこなかったのも、きつとどこかの女の人と一緒にだったんだろう。

浮気されたのに私は全然ショックを受けなかった。

何とも全く思わない・・・

自分が全くショックを受けていないことにショックを受けて、その想いを吹き飛ばすように勢いよく服を脱ぐ。

そして思いつきり体も流さず、湯船に飛び込んだ。

暴力&お金をぶん取られる、それに加えて浮気までされて、私はよっぽどなめられてるんだろう。

悔しいし、惨めだ・・・

だけどそこまでされてもタカの暴力が怖くて何も言えない。

私は動揺した気分を何とか鎮めて、お風呂から出た。

パジャマに着替えて脱衣場から出ると、怖い顔をしたタカが立っていた。

「ヒイ！」

思わずビククリして悲鳴が出る。

何も考える間も与えずに、すごく強い力でタカは私の腕をつかんだ。

「来いよ！」

そしてすごい勢いで腕をひっぱって、ひきずるように私をどこかに連れて行った。

連れて行かれたのはパソコンの前だった。

そして画面を見るように促される。

「・・・・・・・・!!」

パソコンには「チャット ラブ エンジェル」の画面が大きく表示されていた。

逃げる勇気3

「何なんだよ！？このサイト！！」

「・・・・・・・・」

「黙ってんじゃねえよ！！このサイトは何だって聞いてるんだよ！俺が帰ってきて久々にメールチェックしようと思ったたらパソコンにいきなりこの画面があつたんだよ！！」

タカが急に帰ってきたのに動揺して、チャットの画面を消したつもりが画面をただ小さくしたままだったらしい。

自分のうっかりさが本当に今憎かった。

思わず唇を噛んだ。

「聞いてんのかよ！てめえは！！」

いきなりタカのパンチが頬に入った。すごい衝撃で一瞬目がチカチカした。私はその場に倒れこんだ。

「てめえ、こんなサイトで男あさりしてんのかよ？」

倒れこんだ私に容赦なく蹴りが入る。

お腹、腕、太もも、連続で容赦なく蹴られる。
だんだん痛いという感覚もなくなって、ジーンと痺れてくる。

「このチャットサイトでバイトしてるんだよ。チャットするとお金が入るの・・・」

ボーっとしてくる意識の中で私はタカに言う。

タカは倒れている私の髪の毛をつかんで私の上半身を無理やり起こすと、

「はあ？俺が働いてないからって暗に責めてるのかよ！」
と怒鳴って、私のお腹に再び思いっきり蹴りを入れた。

私はもうタカに何も言い返すことができなかった。
私は何を言ってもタカは聞いてくれないだろうし、ましては暴力を振るうのを止めるとは思えない。

それだったらおとなしく抵抗せずにいよう・・・
もう私は何も考える事ができなくなっていた。

「何とか言えよ！ばかやろう！」

「新しく男作って、俺から逃げ出そうなんて考えてるんじゃないぞ
！」

「お前みたいな女、相手にするのは俺くらいなんだよ！」

タカの罵声と暴力は続いた。

私の視界はだんだんぼんやりして、目の前の景色はだんだん霞んできた。

意識も何だかぼんやりとして、痛いのか痛くないのか、自分がどう
いう状態なのかさえもよくわからなくなっていた。

「わかったか！俺に黙ってこんなことしてっから、こんな目に合う
んだよ！」

タカが又私の髪の毛をひっぱって、無理やり私の上半身を引き起こ
して言う。

ブチブチ・・・と、髪の毛がまとめて抜ける音が耳元で聞こえた。

「チツ、気分悪い！」

タカは舌打ちして言うと、私をゴミのように放り出す。
そして私のカバンから財布を出すと、お札を全部まとめて出して、
自分のポケットに入れた。

そこで私の意識は途切れた――

逃げる勇気 4

全身の鋭い痛みで目が覚めた。

どうやら意識を失っていたらしいと気づく。

どのくらい意識を失っていたのだろう・・・

体を少し動かすたびに鋭い痛みが全身に走る。

「痛っ！」

体の痛烈な痛みに耐えながら、私は何とか上体を起こした。

“そういえばタカは・・・！？”

ハッとして、タカがいるか視線だけ動かして探した。

意識が戻ったとわかったら、又殴られるかもしれない。

再び恐怖が走り、鼓動がバクバク早くなった。

だけど部屋には誰もいる気配はしなかった。

「タカ・・・」

念の為に名前をそっと呼んでみる。

・・・何の反応もなかった。

私はほっとして息をついた。

ほっとしたら、又痛みがじわじわと全身に広がる。

鼻に違和感を感じて、鼻を触ると鼻血が大量に出ていた。

どうやら鼻の骨は折れていないみたいだけど・・・

口の中も殴られた拍子に切ったみたいで、鉄臭い味が口中に広がっていた。

今私が抱いてるのは恐怖。

いずれ又タカはこの部屋に戻ってくるだろう・・・

又こんなふうに殴られたり、蹴られたりするの？

又恐怖を感じないといけないの？

もう耐えられなかった――

逃げたい。抜け出したい。

誰かに助けを求めたい・・・

でも誰に助けを求めたらいい・・・？

その時に私の視線はある１点で止まった。

“パソコン”

テーブルの上に置かれたノートパソコン。

私はほぼ無意識に体の痛さにもかまわず立ち上がって、脚をひきずりながらパソコンの前に向かった。

鼻血を袖でぬぐいながらマウスを操作して、何かに操られるように「チャット ラブ エンジェル」の画面を開く。

そしてログインして待機画面にすると、待機メッセージに、
“助けて”と打ち込んだ。

それから私は力尽きたようにその場へたりこんだ。

逃げる勇気5

パソコンの画面にはアザだらけで、髪の毛もボサボサな見るからにやばい私の様子が映し出されているだろう・・・

お客の男性はこの姿を見て、すぐ画面を消すだろうと思う。

でも、もしa i rさん・・・この画面を見てたら私を助けて欲しい・

顔も知らないし、本名すら知らない、会ったこともないけど、私には他に助けを求められる相手がいない。

a i rさんしか、助けを求められないんだ。

助けて。

助けて。

助けて。

私は呪文のように「助けて」と唱えた。
すぐa i rさんを求めている。

a i rさんにS O Sを出したんだ。

a i rさんだけにS O Sを出したんだよ。

それから10分以上たっただろうか――

私のチャットルームには、入室のチャイムは全く鳴らない。

“助けて”

airさんだけに発したメッセージ。

airさんはパソコンに今向かっていないかもしれない。
向かっていたとしても「もう2度と来ない」と言っただので来ないかもしれない。

ましてはこんなやばい状況の女を、顔も知らない相手が助けてくれるわけないよね・・・

こういう考えが、グルグル頭の中を回ってめまいがする。

来るわけがない・・・
当たり前か・・・

わかってはいたけど、私はもうつらくてつらくてたまらなくなつて、膝に顔をうずめた。
私の両目から大量の涙がボタボタ溢れた。

その時、パソコンの画面から、

「くうちゃん・・・？」

私のハンドルネームを呼ぶ声がした。

「え・・・？」

私はビクリして顔を上げる。
パソコンの画面は待機画面ではなくて、《チャット中》の画面になっていた。

入室のチャイム音は、今の私には聞こえてなかったらしい。

「くうちゃん」

再び私を呼ぶ声がある。

すごく優しく、落ちて着いている、だけど私を心底心配してる声だった。

逃げる勇気5

私は涙がボロボロ出て、鼻水も出てるのにもかまわずにパソコンの画面を見た。

パソコン画面には、

> a i rさんが入室いたしました。

と表示されていた。

「・・・もしかしてa i rさん・・・？」

声が震えた。

a i rさんの声は聞いた事なかった。

今までa i rさんはキーボードの文字チャットだったから、声を聞くのは初めてだった。

「うん。何だか切羽詰った感じだから、キーボードじゃ時間が取られるから、マイクつけたんだ」

やっぱりa i rさんはわかってくれたんだ。

S O Sが通じたんだ。

再び涙が溢れる。

「くうちゃん、大丈夫？」

ボロボロ泣いている私は全然大丈夫そうに見えないかもしれない。

私は何度も涙をぬぐいながら、必死でうなずく。
言葉にならない。

「全然大丈夫そうに見えないよ。顔もアザだらけだし」

それだけ言つとa i rさんは黙ってしまった。

数秒の沈黙の後、

「ねえ、くうちゃん、このままそこにいたい？それとも勇気を持って飛び出す？？」

a i rさんも覚悟を決めたような真剣な声で言った。

「……………飛び出したっ！！」

すごくかすかな小さい声だったけど、私は力強くそう言った。

もう現実から逃避するのは嫌だ！

殴られるのも、蹴られるのも嫌だ！！

もう私はここから逃げ出したい！飛び出したいんだ！

「a i rさん、もう私は飛び出したい！逃げ出したい！！もうこんな恐怖を味わうのは嫌なの！！助けて！」

私は今度は大きな声でa i rさんに言ったんだ。

逃げる勇気6

しばらく沈黙が続いた。

どうやらairさんは何か考えているようだった。覚悟を決めているような雰囲気は私は察した。

「わかった。くうちゃんって住んでるのは都内？」

「あ・・・う、うん」

「それは良かった。俺も都内だから何とかなりそうだな。それで最寄の駅はどこ？」

「えっと日暮里・・・」

「わかった。俺、今から日暮里駅に行くよ。30分くらいかかるけど大丈夫？？」

来てくれるの・・・？
私はビックリしていた。

「うん、大丈夫」

日暮里駅まで徒歩10分だけど、今の私の足では20分以上はかかるだろう。

ちょうどいいかもしれない。

「わかった、じゃ、すぐ行く」

airさんはそれだけ言うとはチャットを退室した。

私もチャットの画面を落とすと、パソコンの電源を切る。そして大急ぎで小さなボストンバックに、衣服や日用品、なけなしのお金など思いつくものをボンボンと放り込んでいった。小さなボストンバックはすぐにパンパンになった。

そして私は家の玄関から転がるように外に出た。

タカが今の時間に家に戻ってくる可能性はかなり低いけれど、念のためだ。

ここでハチ合わせするのはかなり避けたい。

チャットでairさんに助けを求めた時はタカが家に帰ってくることなんて頭から抜けていたのに、こうやっていざ逃げ出すことになると、タカに見つかる事に死ぬほどおびえてるのが何だか滑稽だと感じた。

できるだけ早く待ち合わせの日暮里駅に着きたい。

気持ちばかりあせるけど、タカにDVを受けて傷ついた体は全然言う事を聞かない。

脚をひきずりながら、この寒い季節に汗をかきながら必死に駅に向

かう。

いつもの長いとも思わない駅までの道のりが永遠にも着かないとも思われる道のりに思えた。

駅前に近づくと、終電前なので人通りが結構ある。

私のこの形相を見て、すれ違う人はみんな振り向いた。

中には指差してこそそこ何かを言ってるカップルまでいる始末だ。

それはそうだ。

頬は腫れているし、まぶたも腫れている。

口の中も端も切れている。

髪の毛はグシャグシャに乱れている。

まともにも歩けないで、脚をひきずっている。

顔も必死の形相だろう・・・

でも恥ずかしいとも思わなかった。

私は1秒でも早く日暮里駅に着かないといけないのだから・・・

結局20分以上かけて私はやっと日暮里駅に着いた。

私は力尽きて、倒れこむように駅の階段に座り込む。

こんなに寒いのに全身が焼けるように暑い。

まるで夏のような。

汗がダラダラと吹き出して来る。

顔も上げられないくらい私はだるくなって、膝に顔を伏せた。

その時背後から、

「くうちゃん・・・？」

私の事を呼ぶ声がした。

さっきチャットで私を呼んだ声と一緒に声だった。

逃亡1

心臓がバクバク大きい音をたてる。

緊張しながら私はゆっくりと後ろを振り向いた。

振り向いた先には、ものすごく背の高い男の人が立っていた。

「a i rさん・・・？」

その男の人は照れくさそうに、ゆっくりとうなずいた。

初めてa i rさんと会った。対面したんだ・・・
何だか不思議な気持ちだった。

a i rさんは正直顔もかっこよくもなく、かっこわるくもなく普通だった。

だけど全身を優しいオーラみたいなのがゆったりと包んでいるような人だった。

背が高いから余計そう感じるのかもしれない。

a i rさんは急いで来たせいなのか、鼻の頭にうつすら汗がにじんでいるし、上下のスイットに上着をひっかけただけの格好だった。

でも私のために急いで出てきてくれたa i rさんの気持ちが本気でうれしかった。

a i rさんは改めて私を見ると、驚いた表情を隠しきれずに見せた。

「大丈夫・・・？」

恐る恐る私に聞いてくる。

私はゆっくりとうなずいた。

けどどう見てもこの様子は大丈夫とは思われないだろう・・・

「・・・これ着な」

a i rさんは自分の上着を脱ぐと、私にふわっとかぶせた。

そして私の手をいきなり引っ張ると、駅のロータリーから少し離れた方に私を連れて行った。

逃亡2

ロータリーから少し離れたところに黒い自動車が停まっていた。

airさんはその車の鍵を開けると、

「これに乗ってちょっと待ってて。すぐ戻るから」

と言うと、駅のほうへ再び走って戻って行ってしまった。

私はちょっと不安になった。

初対面の男の人の車に乗るというのは、やっぱりちょっと怖い。もしairさんが善人に見えて、すごく悪人だったら・・・

だけでもう家に帰ることはできない・・・

airさんを頼るしかないのだ。

私は覚悟を決めると、ゆっくり黒の車に乗り込んだ。

10分くらいでairさんは戻ってきた。

手に大きいビニール袋を下げている。

何か買い物をしてきたみたいだ。

もしかして悪い仲間を連れて数人で戻ってきて・・・という最悪なシナリオを少し考えていた私はほっとする。

airさんは運転席に乗ると、ビニール袋の中身を自分の膝の上に出した。

中身は、
包帯、
消毒薬、
解熱剤、
シップ
バンドエイド
ミネラルウォーターだった。

「あくまで応急処置だけど、ちょっとひどそうだからここで処置するね」

airさんはそう言うと、私の足にシップを貼って包帯を巻き始めた。

私の為に駅前のドラッグストアで買ってきてくれたんだ・・・
airさんが戻ってくるまでに、変な想像をして不安になった自分が恥ずかしくなった。

airさんは器用な手つきでシップをはって、消毒薬を塗り、包帯をゆるむことなくクルクルと上手に巻いた。
その手つきは慣れているように見えた。

「すごい・・・」

巻かれた包帯がきつくもなくゆるくもなく最適な状態に巻かれて、
思わず言葉が漏れる。

そんなつぶやきを聞いたa i rさんはかすかに笑うと、

「・・・一応、元医者だからね」

と自嘲気味に言った。

その様子からa i rさんはその事は触れられたくないんだなあ・・・
と私は思った。

あっという間に私の処置は済んだ。

逃亡3

処置が終わって一段落つくと、私は急激にだるくなってきた。
駅まで走ってきた時に感じた全身の熱さもまだ治まっていなかった。

「くうちゃん、大丈夫??」

airさんがそう言って、私の額に手を当てた。

「・・・やっぱり・・・」

「え？」

「こんな状態だから、炎症起こして熱出てるんだよ。相当熱あるよ。
全身熱くない？」

「そうかも・・・」

「とりあえず物を食べてないから、本当は良くないけどこれ飲んで」

そう言って、airさんは解熱剤とミネラルウォーターを私に差し出した。

やっぱり先ほどから感じてた熱さは、熱のせいだったのか。

タカから逃げてきてa i rさんに会って、気が緩んだのか私はもうしゃべれないほどに体調が悪くなった。

急いで解熱剤をミネラルウォーターで流し込むと、車のシートに寄りかかって目を閉じた。

「くうちゃん、こんな状態だから、緊急休養所として俺の家に運んでもいい？それともどこか行って欲しいところある？それなら送っていくから」

a i rさんの言葉に私は黙って首を横に振った。

私が行く場所など、どこにもないのだから・・・

a i rさんはそれから何も言わず、エンジンをかけた。

車がゆっくりり出発する。

逃亡4

車は30分程走って、2階建てのアパートに到着した。
アパートのすぐ側の駐車場に車を停めると、airさんはすぐ助手席のドアを開けてくれた。

「一応、ここだけ。くうちゃん、大丈夫？降りられる？」

正直動きたくないほど体がだるかったけど、私は黙ってうなずいた。
そしてゆっくり車を降りる。

そしてairさんの後ろをついていく。

airさんはアパートの階段を上がっていく。
カンカンカンと上ると音がする。

そして、2階の一番奥の部屋の前まで来ると、

「ここなんだ、俺の部屋。汚いから悪いけど・・・」

airさんはそう言いながら、鍵を開けてドアを開けた。

「どうぞ」

airさんに促されて、私は靴を脱いで中に入った。

部屋は思ったより広かった。

廊下も広いし、部屋もリビングと他に2部屋ある。

ただど部屋が広く見えるのは、物が少なくて整然としてるせいかもしれない。

airさんは「汚い」と言ったけど、すごくきれいに片付かれた部屋だった。

airさんはリビングを通過して、リビングの奥の部屋に私を誘導する。

そこはシンプルなシングルベッドだけ置かれた寝室だった。

「くうちゃん、俺のベッドで悪いけど、ここで休んで。君は熱があるんだから」

それだけ言うとairさんは寝室を出ていった。

私はもう正直立っているのもつらかったので、airさんの言葉に甘える事にした。

急に力が抜けて、ダイブするようにベッドに倒れこんだ。

それから私はすぐ意識を失った――

逃亡5

熱にうなされながら私は何度も夢を見た。

夕方に追いかけられている夢。

夕方に思いっきり殴られてる夢

義父に虐待されて必死に助けを求める夢。

母に助けを求めても母から目をそらされてしまう夢。

嫌な夢ばかりだった。

浅い眠りなので、何回も夢うつつに目を覚ます。

やけにリアルな夢で、この夢が現実なのかと思っほだった。

苦しい・・・

助けて・・・

夢の中で、ずっとそうつぶやいていた。

夢の中でぐらい幸せでいたいのに・・・

私は過去や現実にしめられ、夢の中でさえも苦しめられている。

「・・・ん・・・」

顔にまぶしさを感じて、私は目を開けた。

“朝・・・？”

ゆっくり目を開けると、視界には見知らぬ真つ白な天井。
横を見ると窓から明るい太陽の光がさしていた。

少し戸惑って体を起こせば、額から何かがポロリと落ちた。
拾ってみると濡れたタオルだった。

視線をベットの脇に移すと、そこにはベッドに突っ伏して寝ている
airさんの姿があった。

airさんのおうちにいるんだと、そこで思い出した。
霞んでいた私の記憶がよみがえった。

airさんの横には体温計、包帯、湿布、水が入った洗面器などが
散乱していた。

“ずっと、私の看病してくれてたんだ・・・”

額に乗っていたタオルもまだ湿っている。

先ほどまでずっと寝ないで私の看病してくれてたんだとわかる。

私は涙が出そうなくらいうれしかった。

逃亡6

私が起きた気配を察したのか、a i rさんも目を覚ました。半分寝ぼけた様子で、目をこすっている。ただ私の起きた様子を見て、

「俺寝ちゃったんだ！ーごめん」

a i rさんはあせつたように言った。

「あやまるのはこっちです。ベッド占領しちゃって、ごめんなさい。しかもずっと看病してもらったみたいで・・・」

「そんなのはいいよ、病気だったんだし。それより具合は大丈夫？」

「はい。もうそんなにだるくないです」

体のだるさもほとんどなかったし、燃えるように感じた熱さも消えていた。

「良かった。昨日は丸1日ずっと寝てたんだよ」

「え？そんなに？」

私はビツクリして聞く。

そんなにずっと寝ていたんだ・・・

「うん。結構心配したんだよ」

airさんは笑って言った。

すごくairさんが私の事を心配してくれたのは、わかりすぎるほどわかった。

ずっと側についてくれたんだもん。

本当にありがたい・・・

私は改めて姿勢を正した。

「本当にいろいろとお世話になってしまってすみません」

私はairさんに深々と頭を下げた。

「そんなあやまらないでよ。くうちゃんの体調が少し良くなったみたいでほっとしたよ。俺が役に立てて良かったよ。ところで・・・」

airさんも姿勢を正した。

「くうちゃんに暴力を振るったのって誰・・・？」

「・・・・・・・・」

私は一瞬沈黙した。

「言いたくない・・・??」

できれば言いたくないけど、a i rさんにはちゃんと言つ義務があると思つた。

それにa i rさんには話したいと感じた。

「実は・・・彼氏なんです・・・」

「そつか・・・」

a i rさんは少しため息をついて考え込んだ。
言葉を選んでるようだ。

「・・・それで、くうちゃんはどう考えてるの?」

いきなり抽象的な質問を投げかけられて私は戸惑つた。

「・・・・・・・・」

今度は私が黙り込んだ。

「ごめんね、何だか答えにくい質問だったよね。

俺が言いたいのは、あんなにひどい事をする彼氏とこれからどうしたいのって事。

俺は女殴る男は最低だと思っからやっぱり離れるべきだと思っよ」

「・・・・はい」

「なんか離れられない訳でもある？」

私は言葉につまった。

この答えを言うという事は、私の過去を話さなければいけない。

養父にされていた性的虐待。

それを見ないふりをした実の母。

そんな実家を出て生活をするためにしていた援助交際の事。

airさんには私のそういう部分を知られたくないと思った。

黙り込んだ私をしばらくairさんは真剣な顔で見つめていた。けどすぐ笑顔を浮かべた。

「わかった。いずれくうちゃんが話したくなったら話してくれれば

いいからさ。この話はここで終了!」

そしてa i rさんは立ち上がると、

「お腹すいたでしょ??何か作ってくるよ」

と寝室を出て行った。

チャットで話しただけの私を助けてくれて、しかもずっと看病までしてくれたa i rさん。

それなのに深いところまでは気を使って聞かない。

a i rさんは私の今まで関わってきた男の人とどこか違う。

a i rさんに私の全てを打ち明けたい衝動に駆られた。

デート1

airさんは私にすごくおいしいおかゆを作ると、「バイトに行ってくる」と言って家を出て行った。

今は派遣で工場の軽作業のバイトをしているらしい。

元医者の方のairさんが派遣で軽作業しているのも、何か訳ありみたい。

airさんも私と同様に触れられない過去があるのだろう・・・

「早く帰るから・・・」

そう言っ出ていったairさん。

私に「出ていけ」とか「いつまでいるの?」とか聞いてはこない
私が気を使わないようにと、こういうふうに言ってくれたんだろう
と思う。

私もとりあえずラブホテルの清掃のバイトにはしばらく行けないと
携帯で電話をかけることにした。

切っであった携帯の電源を入れて、メールを確認するとタカからの
メールが30件。

留守電も10件以上入っていた。

1件メールを読むと、耐え難いほどの罵言が綴ってあった。

めまいがしてメールは全て消去、留守電も聞かずに全て消去した。

タ力はすごく執念深い。

このままでは済まされない・・・

私の手はいつのまに震えていた。

何とかバイト先のラブホテルに電話をかけて、私は全身に移行した震えを抑えるように毛布をかぶった。

a i rさんが家に帰ってきたのは空も暗くなった頃だった。

「ただいま。くうちゃん、いる・・・？」

寝室をノックして、そつと声をかけてくれるa i rさん。

「くうちゃん、又体調悪くなった・・・？」

電気もつけずに毛布をかぶって震えている私を見て、a i rさんはビックリしたようだった。

私は首を横に振った。

「何かあった・・・？」

私は震えながら、黙って携帯電話を指差すことしかできなかった。

それでa i rさんは全てを察したようだった。

「くうちゃんは今つ具合はいいの?」

暗い空気を打ち消すようにa i rさんが聞いた。

「うん」

熱も下がって、脚の腫れもほほひいたし、少し脚はひきずるけど痛みもなく歩けるようになっていた。

アザも化粧で目立たなくなるほどには薄くなった。

「じゃあ、俺とデートしませんか?」

「え……」

「飯でも食いに行こう!俺、明日は仕事も休みだし、ゆっくりできるから。良かったらデートしませんか?」

ニコニコしているa i rさん。

「嫌……かな?」

私はすごい勢いで首を横に振った。

「うっん！！行く！行きたい！！」

airさんの笑顔が満開になった。

デート2

airさんが連れてきてくれたのは、最近開発が進んでいる臨海副都心だった。

海辺には大きなショッピングモールやビルもたくさん建っている。小さな遊園地もあって、ジェットコースターや観覧車もある。夜景もすごく綺麗で、カップルに人気のスポットだ。

「きれい・・・」

たくさんのライトに彩られた夜空。

車のライトも夜景の一部になってとてもきれい。

道ゆくカップルもみんな笑顔で歩いている。

思わず私も嬉しくて笑顔になってしまう。

「くうちゃん、ここ来るの初めて？」

「はい、初めてです」

airさんは驚いたように目を丸くする。

今まで友達もいなかったし、行くところといったらバイトかスーパーに買い物だけだった。

「とりあえず腹減ったから飯食お！」

「はい！」

私とairさんは小走りで、人でにぎわうショッピングモールへ行

った。

そこでラーメンを食べてから、海辺の遊園地まで来た。
観覧車、ジェットコースター、ゴーカートなど楽しそうな乗り物が
たくさん。

見るもの全てが初めてで新鮮だ。

「これ、乗ろう！」

airさんは私の手を強引に引っ張ってジェットコースターに誘い
込んだ。

私はジェットコースターに乗ったことはなかったけど、こういうの
は絶対苦手だ。怖い……。

「airさん、こ、怖い……かもです……」

「いいから！！こういうの乗って、大声出すとストレスもぶっ飛ぶ
って！！」

結局手をグイグイ引っ張られて、強引に乗せられた。
すごいスピードでジェットコースターが駆け抜ける。

「きゃああー！！」

思わず大声で叫んでしまう。
周りからも絶叫が聞こえる。

このジェットコースターは最後に海上のレールを駆け抜ける。

私とairさんは一番前の席に座っていたので……

「きやあゝゝゝ」

「ぎゃゝゝ」

この寒い中、思いつきり頭に水を浴びてしまった。

髪の毛からポタポタ水滴をたらしながら、私とa i rさんはジェットコースターを降りた。

頭がビショビショになってる私たちを見て、周りの人は「寒そう」とヒソヒソ言っている。

「アハハハハ・・・」

急にa i rさんが大声で笑い始めた。

私は驚いて、キョトンとしてa i rさんを見た。

「くうちゃん、おかしくない？」

「へ？」

「だってこんなクソ寒い中ガキじゃあるまいし、こんなにビチョビチョになってるバカ、うちらくらいじゃない?？」

・・・確かにそうかも。

「アハ・・・」

急におかしくなってきた。

「アハハハハ」

「アハハハハ」

2人で大爆笑する。

お腹が笑い過ぎてツーンと痛くなる。

頭から水滴をたらし、大爆笑してるこの状況にも笑いがこみ上げてくる。

デート3

「やっと笑った・・・」

ふいにa i rさんが真剣な顔で私を見つめて言った。

「え・・・？」

戸惑う私を尻目に、a i rさんはジェットコースター乗り場の側にあった売店でタオルを買ってくると、私に渡してくれた。

私は戸惑いつつ、髪の毛の水滴をタオルでぬぐう。

a i rさんもタオルで髪の毛を拭くと、近くのベンチに腰掛けた。私もそつと隣に座る。

「くうちゃんがさつき笑って、本当にうれしかった」

「え・・・な、なんで？」

「だって会ってから一度もくうちゃんの笑顔を見たことなかったし。だから今日はビックリしたし、安心したよ。俺、くうちゃんは笑ったことがない子かと思ったもん。」

「確かにそうかも・・・」

「え？」

「確かに、私本音でここまでお腹痛くなるほど笑ったり、涙が出るほど笑ったことってなかったかもしれない」

そうだ・・・私はここまで笑ったことはなかった。
作り笑いじゃない、本当の笑顔はなかったような気がする。
そう思うと、私って本当に楽しくない毎日を昔から送ってるんだな
あって思う。

それってすごくさびしくて、空しくなる。

「そっか。でもくっちゃんは作り笑いじゃない本当に笑った顔の方が
かわいいよ」

私の顔はたぶんすごく真つ赤だろう。
そんな私の顔を見てa i rさんが吹き出した。

「ひどいです！！笑うなんて・・・からかわないで下さいっ！」

「ごめん、ごめん。でもからかってはいない。本当だよ。笑った方が
すごくかわいい。笑って毎日を過ごせるようになるといいな。
笑う門には福来たるって言うじゃん」

そう言つてa i rさんは私の頭をくしゃつと撫でた。
私はちよっぴりドキドキする。

「よぉ～し！せっかく来たんだし、いろいろ乗ろっぜ！」

a i rさんは立ち上がって駆け出した。

私もあわてて後を追う。

「どんどん乗るぞ」

「はい！」

お化け屋敷、ゴーカート、メリーゴーランド、コーヒークップ・・・そして再びジェットコースター。

airさんはどんどんいろんな乗り物に私を誘った。
すごいパワフルだ。

・・・っていうか、子供みたい。
はしゃいで、遊園地を走り回ってる。

「俺、ちょっとトイレ。くうちゃん、ここで待ってて」

遊園地内のほとんどの乗り物に一通り乗ると、airさんはそう言
つてお手洗いに行った。

私は一息ついて近くのベンチに座る。

airさんといると楽しいし、落ち着く。

一緒にいるとどんどんairさんのいいところばかりが見えてくる。

airさんは何より優しい。

気を使っけないように、さりげなく気を使ってくれている。

本当に優しくて、いい人・・・

だけどairさんもタカのように最初だけ優しくて、後で豹変して
しまうのだろうか。

私に暴言を吐いたり、暴力をふるうようになるのかもしれない。
男なんてみんなそんなものかもしれないな。

そんな事を考えていると、a i rさんが戻ってきた。

デート4

「よし！もうそろそろ閉園みたいだし、帰ろうか」

「・・・はい」

正直帰りたくなかった。

こんな楽しい時間初めてだったから。

a i rさんはそんな私の気持ちを察したらしい。

「あ、最後にあれ乗ろう」

a i rさんは観覧車を指差した。

「はい！」

嬉しくて思わずはずんだ声を出してしまう。

観覧車はもう閉園時間近くだったせいかわいていて、待たずに乗ることができた。

ゆっくりと観覧車は上昇していく。

観覧車が始めての私はちよつと足がすくんだ。

「怖い？」

「観覧車初めてなんです。ちよつと緊張してるかも」

「じゃ、外見てごらんよ」

外に視線をうつすと、そこにはきれいな夜景が広がっていた。
まるで宝石をちりばめたみたい。

赤、青、オレンジ、いろいろな色の光が点滅したり、色を変えたり
で地上を彩っていた。

「きれい・・・」

「きれいだよね」

こんなきれいなものがあるなんて今まで知らなかった。

この現実世界には私の知らないきれいなものや楽しいことがたくさんあるのかもしれない。

それを知らないで今まで生きてきたなんてもったいないなあ・・・
って思った。

私とairさんはお互い言葉を発さずに、外の夜景を見ていた。

すると、いつのまにか観覧車が頂上まで来た。

高くて怖いけど、360度全てが宝石箱だ。

「くうちゃん手を出して」

「え・・・??」

唐突に言われた言葉に戸惑いながらそつと手を出す。

すると、そこに乗せられたのは、手のひらに乗るくらいの小さな天使の人形だった。

白いお洋服を着て、頭にはちゃんと天使の輪がある。

顔はニコニコ幸せそうに笑っていた。

「さっきのくうちゃんの写真がこの天使に似てるから思わず買ってしまった」

照れたように言うairさん。

「くうちゃんを初めてチャットで見た時に笑顔が寂しそうだと感じたっていうのは前に言ったと思うけど、その笑顔にすごく惹きつけられたのも事実。

パソコンの画面の中のくうちゃんは天使みたいで・・・
何ていうか現実感がなかったんだ。そこにも何だか惹きつけられたんだ」

「現実感がない・・・？」

「うん。何ていうかテレビの中の芸能人みたいな感じかな？だから日暮里駅で待ち合わせした時はすごくドキドキした。本当にくうちゃん存在するのか？ちゃんと来るのかよ・・・って。

でもくうちゃんはちゃんと来た。ちゃんと存在してた。現実世界にちゃんと存在してる天使なんだって実感した。だから思わずこの人形見たら、くうちゃんみたいでつい買ってしまった」

私は気づくと両目からポロポロ涙を落として泣いていた。

「え・・・ごめん！！何か悪い事言っちゃったかな？」

そんな私を見たa i rさんはあせっている。
私は勢い良く首を横に振った。

「違うの！違うの！！悪い事なんて言っていないよ！私こそごめんなさい」

「じゃ、何で？」

「だって私は天使なんかじゃない！」

「え？」

「私は汚い・・・汚い・・・汚いの！！天使なんかじゃないの！！」

私は天使の人形を思いつきり握り締めながら号泣した。
a i rさんは黙って私の頭を撫でた。

観覧車はゆつくりと地上に着いた。

「着いたよ。降りよう・・・」

a i rさんはゆっくりを私の肩を押した。

デート5

a i rさんはゆっくりと人通りが少ないところにひっそりとあったベンチまで私を誘導した。

私は涙が止まらなかった。

天使の人形は私の手に強く握られたままだ。

「大丈夫？」

私の肩を抱いて、ベンチに座らせると心配そうに私の顔をのぞきこんでa i rさんは言った。

私はこっくりとうなずく。

まだ涙は止まっていなかったけど・・・

a i rさんは何と切り出すか迷ってるようだった。
言葉を選んでいる。

だから私は自分からちゃんと言おうと思った。

「a i rさん」

「ん？」

「私は天使なんかじゃないんだよ。私は汚い・・・」

「なんでそんなこと言つの??」

もう私の口は止まらなかった。
全て包み欠かさず話す。

義父の事。

義父の虐待をわかっていながら無視した母親の事。
その義父から一文なしで逃げ出したこと。
お金を稼ぐ為に援助交際をしたこと。

話しながらも何度も言葉につまる。

そのたびにa i rさんは私の肩をポンポンと軽くあやすように叩く。
それはまるでa i rさんが“安心していいよ”と言ってるようだった。

自分でも何でこんな事をa i rさんに話しているのかわからない。
できれば隠しておきたかった。

この事を話したのはタカくらい。

しかもタカに話したのも、知り合ってしばらくたってからだ。

知り合ってすぐのa i rさんに何でこの事を話しているのだろうか？
でも聞いて欲しいと思った。

a i rさんに話したいと思ったんだ。

私は自分の過去を全て話し終わって、黙り込んだ。

勢いに乗って全部話したけど、どう考えても引かれる話だということに、はたと気づいたのだ。

怖くて怖くて、a i rさんの顔が見られなかった。
もしa i rさんが少しでも軽蔑の表情を浮かべていたら、もう私は
立ち直れないかもしれない・・・

「正直ビククリしたかな・・・」

a i rさんが小さい声でつぶやくように言った。
その言葉に私はうなだれる。

軽蔑された？
汚いと思われた？

だけどa i rさんの反応は予想とは反対のものだった。

「くうちゃんがそんなに重い過去を背負ってるなんて、びくくりし
た。でもあの寂しそうな笑顔はそのせいだったんだと納得もしたよ」

「・・・・・・・・」

「でもさ、くうちゃんを虐待したのはくうちゃんが悪いわけじゃな
いじゃない。悪いのはお養父さんなわけでしょ。それに一番悪いの
は実のお母さんだと思う。女はね、母親になったら女であるべきよ
りもやっぱり母親であるべきだと思うんだ。それなのに子供より男
を取ったんだからさ。本当ならそんな男をぶん殴ってでも、くうち
ゃんをかばって助けるべきだと思うよ。離婚すべきだとさえ俺は思
う。」

くうちゃんも実のお母さんの態度に一番ショックを受けたんじゃない

い??」

その通りだった。

ひどいことをされても私を助けるどころか、私にやきもちをやいた母。

“私は愛されてない。ここにいる価値が無い”

そう思った。

それが一番ショックだった。

私の目から再び涙があふれる。

天使のぬいぐるみにポタポタと涙が雨のように落ちた。

過去を思い出してくやしくて悲しいという気持ちもあったけど、私の気持ちを a i r さんがわかってくれたという安堵の思いも強かった。

「援助交際をしたのも悪い事だとは思う。でもこんなことがあったら理性が飛ぶのも仕方ないよ。何よりくうちゃんは生きる為にそういうことをしたんだ。問題はこれからだよ。過去をふっきって、幸せになるためにがんばらないと。いつまでも過去にとらわれてたら幸せになんて絶対なれない!」

「・・・私でも幸せになれるの・・・?」

こんな私でも幸せになれると信じていいのかな?
未来があるって思っていていいのかな?

a i rさんは笑って、そして力強く言った。

「当たり前!!むしろならないのがおかしい!!」

何ていい言葉なんだろう・・・

デート6

「彼氏と別れられないのはやっぱりその過去に原因があったりするのかな？」

「はい。タカ、あつ、彼氏の名前なんですけど・・・も同じような家庭環境で施設に入っていたんです。

タカも出会ったときも寂しい目をしてました」

そう、私と同じ目。

何かを諦めた目。

だけど何かをすごく求めている目。

「どんなにひどいことをされても、殴られても、蹴られても、お金をぶん取られても、私はそんな自分の分身のようなタカを見捨てることができないんです」

何回別れようと思ったし、家を出ようと思った。

ただどできなかった。

その度にタカの寂しそうな目が私を引き止めるのだ。

「くうちゃんの気持ちはわかるよ。でもタカ君とくうちゃんが一緒にいてもダメになるよ」

「・・・」

「実際もうダメになってるじゃない？タカ君とくうちゃんは両依存状態になってるんだよ」

「両依存？」

「うん。タカ君もくうちゃんに依存してるし、くうちゃんもタカ君に依存してる。でもこれって愛じゃないよ」

“愛じゃない・・・？”

私はタカを好きだと思っていた。

それは違ったの？

依存してただけだったの？

「同じような傷を持ったもの同士が一緒にいても、くうちゃんところみたいになるか、傷をお互い舐め合うかになるんだと思う。傷を舐め合うならまだいいけど、DVは違うだろ？幸せは産まないよ」

airさんはため息をついた。

「実際にくうちゃんは苦しんでる。DVは体はもちろん精神も傷つけるんだ。過去にどんな事があったからって人を暴力で支配している理由にはならないよ。俺はDVが嫌いだ！許せない！！」

a i rさんのDVに対する想いには何か尋常じゃないものを感じた。
a i rさんの目が異常に興奮しているように見える。

「くうちゃんには過去の事もあって身内もないし、タカ君を家族
みたいに思っただけで依存しちゃう気持ちもわかるけど、もうタカ君とは
離れなよ。きっとその方がお互いの為にいい」

私は涙をボロボロ流した。

「寂しいの・・・？」

a i rさんがそっと尋ねた。
こつくりとうなずく私。

あんな暴力＆お金を奪っていく男でも私の分身なのだ。
私の唯一の家族みたいなものなのだ。
タカがいなくなったら誰が私の家族になるの??
誰が私の側にいてくれるというのだろう。

デート7

「わかった。じゃ、俺がくっちゃんの兄貴になるよ」

私はその言葉にビックリして、思わず顔を上げる。

目の前には微笑んでいるairさん。

「兄貴には頼りないかもしれないけど。だけど話聞いたり、側にいることくらいはできるから。俺を頼りなさい!」

そう言つてairさんは私の頭をくしゃくしゃ撫でる。

大きくて温かい手だ。

「・・・ありがとう」

再び涙が復活する。

髪もボサボサ、顔も涙でメイクが落ちてグシャグシャ。

airさんはもう1回私の頭を撫でると、何かに気づいてどこかに駆けて行ってしまった。

2分後にまだ泣いていた私の目の前にairさんから差し出されたのは、大きい3段重ねのアイスクリームだった。

ストロベリー、チョコレート、バニラのアイスが大きく重なってい

て、コーンから落ちそうなくらいだ。

私はそのアイスの迫力にビックリして、泣く事を忘れてしまう。
a i rさんはそんな私を見て、笑いながら、

「すごいだろ？」

と自慢する。

「甘いものを食うと幸せな気持ちになる！いっぱい食べなさい！」

そしてa i rさんは強引に私にアイスを握らせた。

「俺は大人だからチョコミント！」

そう言つて、a i rさんはもう片方の手に持っていたアイスを大きな口でほおばった。

a i rさんが子供みたいだよ。

私はアイスを一口ぺろりと舐めた。

甘くて、冷たくて、そしておいしかった。

それは確かに幸せの味がした。

冷たいんだけど、何か温かい味がしたんだ。

私はチラリとa i rさんを見た。

“ありがとう”

照れて言えない言葉を、心の中で何回もつぶやいた。

波乱の幕開け1

あのデートから1週間がたった――

私はまだ図々しくもa i rさんの家にいた。

居候させてもらっている状態。

ほとんど一文無しで出てきてしまったので、行く場所なんてどこにもない。

「いつまでも、いていいよ」と言ってくれるa i rさんのお言葉に私は甘えてしまっている。

せめて少しでもお金をa i rさんに渡したいと思って、ラブホテルの清掃のバイトも再開した（タカにはこのバイトの事を言っていないかったので助かった）

いずれはお金を貯めて、ここを出て行かないと・・・とも思っている。

だけど、その事を考えると私の胸はチクリと痛むのだ。

この感情は一体何なんだろう・・・

この日もラブホテルの清掃のバイトの帰り。

「寒い・・・」

強く吹いた風に思わずそう言葉を漏らした。

冬の日が暮れると、体の芯まで冷える。

しかも今日は風が強いので、余計寒い。

バイト先のラブホテルからa i rさんのおうちまでバスで30分。
1つ前の停留所で降りて、停留所側のスーパーで晩御飯の買い物をする・・・というのが、最近の私の習慣になった。

a i rさんのおうちに来てから、私が晩御飯を毎日作っている。
料理はタカと同棲してる時からしてるし、嫌いではない。

スーパーで今日の夕食の材料を買って、帰り道を歩いていると、

「くうちゃん!!」

a i rさんの声がする。

振り向くとa i rさんが笑顔で、私の方に走ってくる。

「a i rさん、今帰りですか？今日は早いですね」

「うん。今日は作業が早く終わったから、特別。その分重労働だったよ」

いつもa i rさんが帰ってくるのは夜8時くらい。

今日はまだ6時だから相当早い。

2人で家まで一緒に帰るのは始めてだ。

家まで徒歩10分の距離。

いつもより何だか嬉しいのはなぜだろう。

a i rさんは私の持ってたスーパーの買い物袋をさりげなく持ってくれる。

「ありがとう、a i rさん」

「こういう気遣いがうれしい。」

「ところで、くうちちゃん」

a i rさんは言いにくそうに切り出す。

「何だか現実世界でa i rさんってハンドルネームで呼ばれるのってちょっと抵抗あるっていうか、照れるんだけど・・・」

「あ・・・」

「ずっと言おう言おうと思っていたんだけどね」

「ごめんなさい」

「いやいや、あやまらないで。そんなつもりで言ったわけじゃなくてさ・・・」

確かに私はa i rさんの本名を知らなかった。
家には表札がなかったし。

反対にa i rさんも私の本当の名前を知らない。

「これから本名で呼んでくれるとうれしいんだけど。俺も良かったらくうちゃんを本名で呼びたいし」

「はい」

「俺は小泉大翔。大空を翔るでダイトだよ」

「大空・・・？」

「うん。親がそう言って、つけてくれたんだ。名前負けしてるけどね。ダイちゃんでも、何とでも呼んで」

同じ“空”の名前。

何だか私は不思議な気分だった。

変な話、すごく運命を感じたんだ。

「あつ、私は森下空良です。空に良しでソラ」

「ええ〜！〜！同じ空じゃん！！すごい！！何だか運命だな。」

運命。

同じ事思ってるんだ。私は驚いた。

「まさに兄弟になる運命って感じじゃない？兄弟って同じ意味の名

前多いしな」

心に重い石を置かれた気分だった。

“兄弟”

嬉しい言葉なはずなのに、何だかすごくきつい言葉に感じてしまっ
変だ。

私はあのデート以来ちょっとおかしい。

「じゃ、俺は空良ちゃんって呼んでいいかな？」

「はい。私は大翔さんって呼びます」

「ちょっとかたいけど、まあ、いいや」

そう言って、2人で笑いあう。

でも本名で呼び合うのは嬉しい気分だ。
私の全てを包み込んでもらってる感じ。

気づくと、もうアパートの下まで来ていた。
いつもはスーパ―から家までの長く感じる距離なのに、今日はなぜ
か短く感じた。

波乱の幕開け2

いつものように階段を上がって、2階の奥の部屋まで歩いていくと、ドアの前に誰か人が立っているのが見えた。

明らかに私たちの帰宅を待っていた様子だ。

私は心臓がバクバクした。

しかしその人の方が私たちに先に気づいたようで、ゆっくり私たちの元に近づいてくる。

「・・・真帆？」

大翔さんがつぶやいた。

知り合い？

私は改めてその真帆さんなる人物に視線を移す。

近くで見るその人はとてもきれいな女の人だった。

つやつやの黒髪は肩の上でまっすぐ切りそろえられ、顔も目が大きくてすごく整っていた。

スタイルも抜群で、シンプルなグレーのパンツスーツがよく似合っている。

何よりも凛として、知性がある雰囲気で見寄りがたい。

「久しぶり、大翔」

その人は大翔さんの前に立つと、落ち着いた声で言った。

「どうしたんだよ、真帆？」

「ん。今日は学会が早く終わったから、寄ってみたのよ」

「ビックリしたよ」

「いきなり連絡もしないでごめんなさい」

大翔さんの知り合いというか、直感的に2人はもっと深い関係ではないかと私は察知した。

真帆さんは大きい瞳をチラリとこちらに向けた。

「どなた・・・？」

顔は明らかに不審そうな顔をしている。

「あつ、森下空良といいます」

私はあわてて、頭をペコリと下げた。

「事情があつて今預かつてる子なんだ。俺の妹みたいな存在なんだよ」

大翔さんがあわてて説明する。

“妹”という言葉に、なぜかすごく泣きそうになった。

「豊中真帆です」

真帆さんは不審そうな顔を崩さず、無愛想に挨拶した。

「せっかく来たんだし、寒いから入れよ」

大翔さんが真帆さんの肩をそつと押す。

私はなぜかすごく悲しい気分になって、真帆さんの後に続いた。

波乱の幕開け3

真帆さんは玄関で靴を脱いで上がると、当然のようにリビングに向かい、ソファアーの上に腰を下ろした。

真帆さんは、何回もここに来てるんだ・・・って思った。
もしかして彼女さんだったりするのだろうか。
何だか真帆さんの一つ一つの行動が無性に気になってしまう。

大翔さんは冷蔵庫からウーロン茶のペットボトルを出すと、コップにトポトポついて、真帆さんに渡す。

「それでどうしたの、今日は？」

大翔さんが真帆さんの前に座って聞く。

「この間の話は考えてくれた??」

真帆さんが大翔さんの顔をまっすぐみすえて聞く。

“この間の話・・・?”

私は当然わからない。

「真帆、それは俺は何度も何度も断ってるはずだ」

「それがわからない！お父様だってそれを望んでいるのに！その為だったら、いくらでも力を貸すって言っているのよ」

「ごめん・・・教授にもその件は真帆から改めて断っておいてくれないか？もう俺はあそこには関係のない人間だしな」

「わからないわ！！あなたの实力はみんなにとって必要なものなの！！」

「もう俺は戻る気はない・・・」

真帆さんの口調がヒートアップしていく。

それと反対に、大翔さんは冷静にあくまで自分の意見を変えようとしない。

「わかったわ。今日はとりあえず帰るわ。でも私は絶対に諦めない！！あなたがYESというまでね」

真帆さんはそう言ってカバンをつかむと、部屋を出ていった。パタンという玄関のドアが閉まる音が聞こえる。

大翔さんは何かに必死に悩んでる様子で微動だにしない。私は何か話しかけようかと頭の中で言葉を探っていた。そんな様子に気づいた大翔さんは、

「空良ちゃん、ごめんね、お騒がせしちゃって・・・」

と無理に作ったような笑顔で言った。

「いえ・・・」

「真帆は医者だった時の先輩だったんだ。ちょっといろいろあってさ。本当にお騒がせしてごめんね」

真帆さんもお医者さんだったんだ・・・

しかも同僚。

確かに真帆さんのあの雰囲気はお医者さんって感じはする。

でも「お父様」「教授」という言葉が真帆さんの口から出たけど、一体何の事なんだろう。

何よりすごく大翔さんが苦しんでそうな、悩んでいそうな様子だった。

それは真帆さんの存在やさっきの言葉が重要だということを物語っていた。

私が口を開けかけた時、

「空良ちゃん、ごめん。俺もう疲れちゃったから、もう寝るわ」

そう言って、大翔さんはリビングを出て行った。

部屋のドアを閉めるパタンという音が、大翔さんの心のドアを閉める音に聞こえた。

気づいた気持ち

私はしばらくずっとその場に佇んでいた。
真帆さんの事が頭から離れなかった。

遊園地で大翔さんがくれた天使の人形を握りしめた。
つらい時や、元気が欲しい時、私はその人形を握り締める癖がついてしまっていた。

真帆さんは大翔さんの彼女なの・・・？
お父さんや教授って何・・・？
大翔さんの過去と関係あるの？？

頭の中をグルグル回る先ほどの出来事。
そして疑問。

大翔さんは私に何も話さず、部屋に閉じこもってしまった。
きっと一人で何もかも抱えこんでしまう気なんだろう・・・

それとも私は部外者、関係ないから何も話してくれないのかな？
私は自分のつらいことや、過去の重荷も大翔さんに全部話して、重荷を半分背負ってもらった。
そして随分心が軽くなった。
一人じゃないのかもしれないって思えることができた。

私も大翔さんの背負ってるものを、半分背負いたい！！
少しでも楽になってもらいたい。
苦しむのが少しでも減ればいいと思う。

私じゃ頼りないだろうか。

もしかして真帆さんみたいな人にだったら全部話せるのだろうか？

大翔さんのいる部屋の中からは、物音一つしない。

“何だろ？この気持ち”

私の心の中は今までに感じた事のない気持ちに支配されていた。

大翔さんの事を知りたいという気持ち。

大翔さんの過去を半分背負いたいという気持ち。

そして何より真帆さんの存在・・・

正直言つて、私は真帆さんが大翔さんの彼女だったり、大切な人だったら嫌だっと思っていた。

いや、真帆さんじゃなくても、他の人でも嫌だ！

大翔さんが大切に思う人や優しくする人が私だけだったらいいのに・・・

私だけを見てくれたらいいのに・・・

私は大翔さんの妹じゃ嫌なのだ。

“だったら何がいいの・・・？”

心の中の私の声が問いかけてくる。

“彼女・・・？”

答えがたった一言、すぐに心に浮かんだ。
自分で答えを出して、驚いた。

もしかして、これが好きって気持ちなのかな？
恋・・・ってやつなのかな？

大翔さんの事を考えると胸が痛くなる。

その微笑が私だけに向けられるものならいいのにつて思ってしまう。
そうだ。

自分でもわかっていたような気がする。

私、大翔さんの事が好きなんだ――

でもきっと、大翔さんはたぶん私を妹くらいにしか思っていない。
両親の虐待を受けて、彼氏からDVされてた私に同情してるだけなのかもしれない。

しかも真帆さんは知性的で美人ですごく魅力的な人だ。
あんな人が側にいたら、私なんて見向きもされないよね・・・
真帆さんを好きになるに決まってるもん。

でも妹だつたらずつと側にいられる・・・
カッブルみたいに簡単に別れたりはしない。
だけど私は妹じゃ嫌なのだ。

「どうしよ・・・」

私はその場に崩れるように座り込むと、膝を抱えてつぶやいた。
まるで子供のようだ。

“好き”って自覚すると余計苦しいね・・・

私は立ち上がって大翔さんのいる部屋のドアの前に行った。
もちろん声はかけられない。
でもドア越しに強く思った。

“大翔さん、好きです”

大翔さんの過去1

次の日、私は大翔さんの声で目を覚ました。

「空良ちゃん、空良ちゃんってば！こんなところで寝てると風邪ひいちゃうよ」

驚いてガバツと起きると、そこはリビングのソファだった。
昨日そのままいつのまにか寝てしまったらしい・・・

「風邪ひいてない？」

心配そうに聞く大翔さんに、私はこくんとうなづく。

大翔さんは安心したように微笑んだ。

好きだって意識してしまうと、何だか恥ずかしいし照れてしまう。

「ちょっと空良ちゃん、顔赤いよ！！やっぱり風邪ひいたんじゃないの？」

大翔さんがあせった表情で、私の額に手を当てる。
大きいちよつと冷たい手に体温が上昇しそう。

「ん〜」。別に熱はないみたいだけどな・・・」

首をかしげる大翔さん。

顔が赤いのは大翔さんのせいですから。

もちろん言えないけど・・・

人を好きになるっていうのは、こんなに相手を意識してしまったり、相手の行動や表情をずっと見てしまうもんなんだな・・・

恋って忙しいし、何だか大変だ。

だけどころやってドキドキしたり、浮き上がるようなふわふわした気持ちは悪くない。

そんなドキドキした気持ちを抑えるためにも、私は昨日から気になつていたことを口に出す。

「あの・・・大丈夫なんですか？昨日の真帆さんの事・・・」

「あゝ、大丈夫だよ、別にたいしたことじゃないし。反対に心配かけてごめんね」

大翔さんは嘘つきだ。

目の下には寝不足を示す黒いクマがくつきりと現れている。でも態度はいつもと同じ大翔さん。

それが私にはとても悲しくて、寂しかった。

私にもいろいろ話して欲しい。

もし悩んでることがあったら、ぶつけて欲しい。

結局この後、大翔さんはいつものように派遣の仕事に行った。

私のラブホの清掃の仕事はシフトで休みだったので、今日は部屋の掃除や洗濯をして過ごした。

やっぱり居候なので、こういうことはちゃんとしたい。

それに私はずっと家事をやってきたので、そんなに家事が苦痛でも無いし、嫌いでもないのだ。

家事はきりが無い。

時間をつい忘れて一生懸命やってしまう。

気づくと、もう日が落ちていた。

時計を見ると、4時30分。

時間って過ぎるのが早い。

そろそろ夕食の支度をしようと、台所に行こうとしたその時、

ピンポン

インターフォンが鳴った。

私は急いでインターフォンのカメラを確認する。

そこには真帆さんが立っていた――

大翔さんの過去2

「すみません。今大翔さんはいません」

私はインターフォンのマイク越しに真帆さんに言った。

真帆さんは大翔さんに昨日の話の続きをしにきたのだろぅと思った。

「うっん、いいの。今日は大翔じゃなくてあなたに用があるの」

真帆さんはカメラ越しに、私の顔が見えているかのように、まっすぐに見据えて言った。

そのまっすぐな瞳にたじろぎながらも、私は真帆さんの話を聞こうとすぐに覚悟した。

真帆さんの口からでも、大翔さんの昨日の事が詳しく聞けるかもしれない。

私は玄関まで行って、ゆっくりドアを開ける。

「どうぞ」

真帆さんは無言で中に入ってくる。

リビングに入ると、真帆さんは昨日座った位置と同じところに座った。

私はお茶を入れると、真帆さんの前の机に置いた。

そして私はテーブルをはさんで、真帆さんの前に腰を下ろした。それが合図のように真帆さんはうつむいていた顔を上げた。

「急にお邪魔してごめんなさいね」

「いえ・・・」

「あなたは大翔の彼女なの？」

「ち、違います」

真帆さんは再びうつむいた。
黒髪がサラサラと揺れる。
何を言うべきか考えている感じだ。

「ねえ、昔、大翔が医者だったっていうのは知ってる？」

「はい。以前聞いたことがあります」

確か私がタカの所から怪我をしながらも逃げてきた時に、大翔さんが傷の手当をしてくれていた時そう言っていた。
包帯を巻くのがすごく慣れている様子だったから、納得したっけ。

「大翔は京凜大学病院の医師だったのよ」

「・・・!!」

驚きで一瞬声が出なくなつた・・・

京凜大学病院。

誰でもその名を知ってるほどの有名な大学病院。

医者腕も一流。

芸能人や政治家のご用達でもある病院だ。

特に外科の腕が一流らしいと聞いたことがある。

「・・・それは初めて聞きました」

「そうなの・・・」

「じゃ、真帆さんも京凜大学病院の医師ってことですか？」

「そうよ・・・というか、大翔が京凜に勤められるように働きかけたのは私なのよ。私の父が京凜大学病院の教授なの」

私はビククリして、目を見開いた。

「大翔とは大学の医学部のサークルで知り合つたの。大翔は大学の頃から優秀だったわ。だからうちの父も喜んで大翔が京凜に勤められるように推薦してくれたわ」

今まで知らなかった大翔さんの過去がどんどん明らかになっていく。

「私たちは大学3年からずっとつきあってた。京凜に2人で勤め始めて、1年で婚約したわ。大翔は優秀だったし、父も大賛成だった。全ては順調だったわ。あの時までは・・・」

あの時・・・？

たぶんこれが一番大翔さんが触れられない過去の出来事なんだろう・・・

私の心臓はバクバク早く動き出す。

大翔さんの過去3

「ある日大翔が当直の日に夜間救急で大怪我の患者が運ばれてきたわ。女性だった。その女性は全身打撲の状態で、体中にアザだらけだった」

「・・・DV・・・？」

思わずつぶやいた。

真帆さんは私の顔をじっと見つめると、首をゆっくり縦にふった。

「そう。彼女は旦那さんからDVを受けていた。ものすごい状態だった。身体はもちろん精神的にも不安定になっていた。

担当の医師は大翔になった。大翔は外科的な怪我の処置だけじゃなく、彼女の相談にも親身になったのよ」

大翔さんらしいと思った。

真剣に人を心配する。

おせっかいと思えるほどに親切に。

そうするだろうということは私が一番知っている。

「彼女は大翔のアドバイスによって、離婚しようと思ったわ。だけど彼女は夫の元に戻されてしまったの」

「え．．．なぜ？」

「彼女の夫は有名な政治家の息子だったの．．．」

京凜大学病院は政治家のご用達の病院でもある。

それはみんな周知の事実だった。

だから政治家の圧力には弱いのだろう。

容易に想像がつくことだ。

「彼女は他の医師や教授たちの猛烈な反対にあつて、夫の元に戻された。大翔は必死になって抵抗した。だけど無駄だった。でも彼女は数日後に又病院に戻ってきた。物も言えない状態だね．．．」

「．．．どういう事ですか？」

「殴られすぎて脳が損傷してしまった。意識を失ったまま、植物状態になってしまったの．．．」

なんてことだろう．．．

私は思わず声が漏れそうになって、顔を両手でおおった。

他人事とは思えなかった．．．

私もこの前までそうなつていても不思議じゃなかったのだ。もしあのまま大翔さんに助けてもらわなかったら．．．想像するだけで震えが止まらない。

「でもそれって傷害・・・っていうか、殺人じゃないですか！！警察とか公的機関は動かないんですか！？」

私はつい熱くなってしまうて、叫ぶように疑問を真帆さんにぶつけた。

真帆さんはため息をついた。

「さっき言ったじゃない。京凜大学病院は政治家御用達だって・・・」

「

「は？」

「全部揉み消されたの・・・」

「何ですか！！それ！！」

「それは大人の事情ってもののよ。仕方がないことなのよ・・・」

何なんだろう！！それは！？

私は心底むかついていた。

怒りで手が細かく震えた。

だってDVされて、痛い目にもあって、意識も戻らないくらいひどい事されたのに、その加害者はのうのうと何もなかったかのように暮らしてるなんて許せない。

何もなかったかのように生きてるなんて卑怯だ！

こんなの大人の事情なんかじゃない。
卑怯者の言い訳だ！

「何ですか？？それ・・・大人の事情なんて格好つけて言ってるだけで、親の力を借りて逃げてるずるい奴じゃないですか！！すごい汚い！！最低な奴だと思います！！」

「大翔もそう言ったわ・・・」

真帆さんはポツリと言った。

「大翔はすごく怒ったし、告発までしようと考えていたわ。でも病院関係者の圧力につぶされて、できなかった」

「汚い・・・」

「そうね、汚いわね。そんな病院に大翔は絶望したのね。大翔は京凜大学病院を去ったの。それと同時に大翔は私との婚約は解消した」

「そんなの大翔さんが辞めるの当たり前です！！」

大翔さんは正義感が強い。

きっと本気で告発をしようとしていたんだろう。

それに圧力をかけられたら絶望する。

しかも自分が必死に働いていた病院に・・・

大翔さんの過去4

「でも真帆さんは彼女だったんですね・・・？」

「そうだけど・・・」

「彼女だったら、大翔さんの事、支えてあげなかったんですか？味方になってあげなかったのですか？」

こういうときに支えてあげたり、力になってあげるのが彼女の役割だと思う。

真帆さんも同じ医師なんだし。

真帆さんは顔を伏せ、ゆつくりと冷笑を浮かべた。

その笑みはまるで自分を蔑んでるかのような笑みだった。

「味方になんてなれなかったわ・・・」

「え・・・」

「私は卑怯かもしれないけど、大人だから。医師を辞めたくなかった。父も同じ病院の教授なわけだしね。父にも失望されなくなかった・・・私も周りと一緒にになって大翔に旦那さんの元にその彼女を返すように説得した」

「は！？それってひどくないですか？唯一の味方である彼女にも背を

向けられて、そんなんじゃない大翔さんが医師を辞めるのは当たり前です！」

真帆さんを含め京凜大学病院の人たちもDVの加害者と一緒だ。その女の人がかわいそうだ。

だけど真帆さんは顔を上げて、きっぱりと言う。

「そうね。でもこうは考えられないかしら？それなら大翔が偉くなって教授になってこの病院を変えればいいって。一時の感情に流されて、逃げるなんて大翔は甘いわよ」

「詭弁だわ。彼女とは思えない言動だと思います」

「そうかもしれない。でも大翔は外科の腕は一流だし、教授になって将来病院を変える力は持っているわ」

「・・・」

「それにバックボーンもあるわ。私と結婚すれば教授への道は近くなる」

真帆さんは私の目を見据えて言った。

「私は大翔に医師に戻って欲しいの。そして京凜大学病院に戻ってきてほしい。それに私は大翔がまだ今でも好きなのよ。諦められない」

い
」

真帆さんの気迫に押されてしまい、私は黙るしかなかった。

「ところでこの際はつきり聞くけど、あなたは太翔の一体何なの？
」

「・・・」

私は真帆さんのその質問に答えられない。
黙ってうつむくしかない。

何て答えればいいのだろう・・・自分でもわからない。

「もしかして、予想だけどDVの被害者・・・？」

私はいきなり確信をつかれて、驚きを隠せない。
手に汗がいつぱい出てきて、私はそつと服で汗をぬぐった。

「凶星か・・・」

そんな私の様子を見て、真帆さんは予想が当たったことを確信したらしい。

大翔さんの過去5

「失礼を承知で言うけど、大翔はあなたを今意識を失っている女性に重ねてみるだけだと思う。その女性の代わりにあなたを助けようとしてるのよ」

心臓に何かを刺されたようだ。
グサツとすごいショックと、痛みが走った。

私はその女性の代わり・・・？

同情よりもそれって悲しい。

「大翔はさっきも言ったけど、ものすごく医者としていい腕を持ってる。大翔の治療で助かる命もたくさんあると思うの。だから大翔の邪魔はしないで欲しい。はつきり言うと、これ以上関わらないで欲しいの」

真帆さんはきつぱりと言った。

「男と女が同じ屋根の下に住めば、情もわいてきておかしな事になるとも限らないし。あなたのDVについては、私の知り合いの弁護士や専門機関を紹介するから。大翔と何も関係が元々なかったんでしょ？もう十分じゃない？」

力が抜けてしまった。

握っていた天使のぬいぐるみも手からポロリと落ちてしまった。

真帆さんの言ってる事は全てもっともだ。

私と大翔さんは血のつながりもないし、関係がない。

チャットで知り合っただけの関係。

それにもいろいろな世話になりっぱなしで、十分お世話になった。

真帆さんは私の方をまっすぐ言うと、かすかに頭を下げて言った。

「ごめんなさいね。いろいろ失礼な事言っちゃって。でも私も必死なの。大翔を諦めたくないのよ」

真帆さんも必死なんだとは伝わった。

大翔さんの医者腕も含めて、まだ愛してるんだと思う。

真帆さんはカバンを持ってゆっくり立ち上がった。

「今日はいきなり来てしまっでごめんなさい」

「いえ・・・」

「でも今日私が言ったこと忘れないで欲しいの」

「わかりました」

私がそう返事をする、真帆さんは安心したように少し笑った。
そして真帆さんはゆつくり頭を下げると、玄関の方に歩いていった。
私は真帆さんを玄関まで見送るのも忘れて、ひたすらその場で放心
していた。

ゆつくりドアが閉じられる音が聞こえた。

大翔さんの過去6

その後もしばらく私はその場から動けず、座り込んでいた。

体を動かなかったが、頭の中ではさつき真帆さんから言われた大翔さんの過去がグルグル回っていた。

大翔さんの過去が改めて、心にズシンと重くのしかかる。

DVを受けた政治家の息子の妻さん、つらいだろうな・・・

そしてその不正を告発できなかった大翔さんもつらかっただろう。

そのうえ、唯一心の支えであって欲しかった真帆さんまで一緒になつて大翔さんの味方をしなかったなんて・・・

大翔さんの気持ちを考えると、くやしくて私まで涙が出そうになる。

でも真帆さんの言う事には一理ある。

大翔さんの医者としての腕だ。

大翔さんの治療で助かる人もたくさんいるのかもしれない。

そう考えると、医師に戻った方がいいんじゃないか・・・とも思う。

すると、大翔さんはもつと病院内の汚い事や不正（真帆さんは大人の事情と言いそうだけど・・・）を見なきゃいけないだろう。

下手をすればそこに染まってしまうかもしれない・・・

そんな大翔さんは見たくないよ。

変わって欲しくない。

いつまでもお節介で、優しくて、あたたかい大翔さんでいて欲しい。

こんな事思ふのって自分勝手かな・・・

私がこんな風に思う資格ってないのかもしれない。

だって今の私って大翔さんにとって何なんだろう・・・

迷惑をかけるだけの存在。

守ってもらっただけの存在。

重荷・・・かもしれない。

でもそれって、迷惑だよね・・・

足引っ張るだけの邪魔な存在じゃない。

私はもういい加減に大翔さんの元から出ていくべきなんじゃないか

もう十分大翔さんにはいろいろしてもらった。

本当はもっと早く出て行くべきだったのかもしれない。

わかってた。

わかってはいたけど・・・

大翔さんのあたたかさ、そして側にいることの居心地の良さについて甘えてしまった。

それに自分の気持ちにも気づいてしまった。

好きな人の側にいたいって、そう思ってしまった。

だけど、私は段々欲が出てきた。

真帆さんにさっき言われた言葉にショックを受けてしまったんだ。

私をDVを受けた政治家の息子の妻さんと重ねて見る――

初めは自分が大翔さんの事が好きだったら、相手が自分をどう思っているのかなんでどうでもいい。

ただ一緒にいられるだけでいいと思ってた。

だけど、人間って欲張りだ。

どんどん欲が出てくる。

どんな人であれ、誰かと私を重ねて見て欲しくない。

これからもずっと一緒にいたら、私はどんどん欲張りになるだろう・

・
そしてますます迷惑をかけて、大翔さんの重荷になっていく・・・
そんなの嫌だ・・・

ずっとずっと、それがダメならもう少しだけでも大翔さんの側にいたいけど、これ以上一緒にいたら、もっと別れるのがつらくなる。
今以上に心に深い傷を残すことになる・・・

私は床に落とした天使のぬいぐるみを拾い上げて、ギュッと抱きしめた。

つらい・・・

どんなに考えを張り巡らしてみても、結局私はもうここにいるべきじゃないのかもしれない・・・っていう結論にしかたどり着かない。

さよならの決意 1

私は震える足でよろめきながら、立ち上がった。

そしてここに来る時に持ってきた小さなカバンに洋服や携帯などを投げ込むように入れる。

今の時間はPM7時。

後、1時間ほどで大翔さんが仕事から帰ってくるだろう。

大翔さんの顔を見るとつらいから、それまでに出て行かないと・・・

そう、私はここを出ていくことに決めたんだ――

傷が浅いうちに早く。

又大翔さんの顔を見たら、出て行けなくなってしまいうから。

涙が出そうになるのをこらえながら、私はテーブルに天使のぬいぐるみをそつと置く。

手が細かく震える。

この天使のぬいぐるみは私の宝物だ。

置いていきたくない・・・

だけどこれを置いて行かないと、心の整理がつかない気がした。

「ごめんね・・・」

震える声で言うと、私はゆっくりと玄関に向かった。

玄関の鍵をかちやっとなめる音がつらくて、私は思わず目をぎゅっとつぶった。

鍵はポストに落とす。

唇をぎゅっと噛み締めながら、私は歩く。

冬の空気は冷たくて、全身が凍るようだ。

心が凍りそうなくらいにつらいから、余計そう感じるのか。

私は手にそつと息を吹きかけた。

それでも手は全然温かくならずに、震えは止まらない。

私は小さなカバンを1つだけ持って、駅に向かっていった。

駅に向かうしかなかった・・・

だって行く場所なんてないのだから。

当たり前のように通り慣れた道とも今日でさよならだ。

アパートの前の駐車場。

バス停の前の小さな黄色のベンチ。

夕方はとても混雑するスーパ―。

もう行く事も通る事もなくなると思ったら、又目の奥がツーンとして、涙が出そうになる。

それを必死に唇を噛んで、私はこらえた。

いつもの倍くらいの時間をかけて、私は駅に到着した。
駅の温かい明かりに少しほっとする。

駅には家路を急ぐサラリーマン、楽しそうなカップル、仲良くはしゃいでる女子高生が行きかっていた。

みんな誰かと楽しそうで、みんな自分の居場所を持っていて、みんな自分の帰る場所があつて・・・

みんなすごく幸せそうに見えた。

それなのに、私はどこにも行く場所も帰る場所もない・・・

駅にいる人たちを見ると、孤独なのが自分だけのようで、私はすごく寂しくなった。

私はため息をついて、仕方なく駅の階段に腰を下ろした。
行きかう人をずっと見ているしかなかった。

寂しいな。

寒いな。

それよりこれからどうしようか。

どこに行こうか。

当然タカの所になんて戻れないし、第一戻りたくもない。
考えるのに疲れて、私は膝に顔をうずめた。

さよならの決意2

その時、

「おねえさん♪」

背後から声がした。

振り向くと、そこにいたのはいかにも軽そうなサラリーマンだった。髪は明るい茶髪、耳たぶにはピアス、ネクタイはだらしなくゆるんでいる。

サラリーマンというより、ホストにしか見えない。

「こんな寒いのに、こんなとこに座り込んで何してんのぉ〜?」

「別に・・・」

「もしかして家出少女?」

「・・・」

「凶星??」

サラリーマンはいつのまにか私の隣に腰を下ろして、どんどん密着

してくる。

正直気持ち悪い。

露骨に下心丸出し。

「おねえさん、寒いしどっか行こうよ〜
行く場所ないんだろ？俺とどっか行こう」

サラリーマンは図々しくも私の肩に手を回して言う。
虫唾が走る！

やっぱり男ってみんなそう。

女をエロで利用することしか考えてない。

でも、一人違った・・・

大翔さんだけは違ったな。

私の頭の中に大翔さんのふんわりした綿菓子みたいな笑顔が浮かんだ。

「いゝよ・・・」

それを打ち消すかのように私はそう返事をした。

「そう来なくっちゃ！」

男はめっちゃめっちゃハイテンションになって、私の腰に手を回して私を立たせると、どこかに向かって歩き出した。私は抵抗もせずに男に体を預けて、歩き出す。

もうどこでもいいや・・・
どうなってもいいや・・・

だってどうせどこにも行く場所も帰る場所もない・・・

サラリーマンが私の肩を抱いた。

密着してるから身体は温かいはずなのに、全身が凍えるように寒かった。

体がブルブル痙攣するように震える。

「寒いのか？」

サラリーマンはニヤニヤしながら聞いてくる。

私は黙って首を縦に振った。

「じゃさ、あたたかくなれるようなく行こうぜえい」

サラリーマンは私の肩を抱く手に力をこめた。その手は“逃がさない”と言ってるようだった。

駅を歩きかう人たちはみんな幸せそうで、周りの空気までもがあた
たかそうだ。

私くらいだろうな。

人と一緒にいるのにこんなに寒いのは・・・

サラリーマンの足は駅の近くのラブホテル街に向かっていく。

さよならの決意3

その時、私は思いっきり誰かに右肩をつかまれた。

驚いて振り返ると、そこには大翔さんが立っていた。
顔を真っ赤にして、こんなに寒いのに汗をいっぱい浮かべて息を切らしている。

「大翔さん、何で・・・？」

思わず声が漏れる。

何で大翔さんがここにいるのだろう。

嬉しさと驚きで私はこれ以上声が出せない。

「何だ、てめえは・・・？」

サラリーマンは大翔さんの存在に気づいて、怖い顔ですごんだ。

そして大翔さんの私の肩に乗った手を振り払った。

私はそのサラリーマンの形相にタカの面影を感じて、恐怖を感じる。
ただ大翔さんはそんなサラリーマンに全くひるむ様子はいなかった。

「この子は俺の妹です。悪いけど返してくれる？」

「は・・・？」

頭が悪そうな声を出すサラリーマン。

「妹なんかじゃないよ!!」

思わず私は叫んだ。

又、大翔さんは私の事を妹と言った。

でも私は大翔さんの妹じゃない。

妹なんか嫌なんだ！

大翔さんは私の叫びに驚いたように目を見開いた。

サラリーマンはその言葉を聞いてニヤニヤしながら、大翔さんに近づいた。

「お兄さぁん、妹じゃないってよ。ふられちゃったねえ。そういうわけで邪魔しないでね」

「空良!どういうことだよ!」

サラリーマンは私に詰め寄ってくる大翔さんを面倒臭そうに突き飛ばした。

そして再び私の肩を抱いてホテル街に向かおうとする。

私は大翔さんの顔を見ないように、うつむくことしかできなかった。

「待てよ・・・」

大翔さんは立ちほだかると低い声で言う。

「つべこべ言わないで、その子返してくれる・・・?」

顔は真剣に怒っている。

今までに見たことがなかったくらいに怖い顔だった。

あまりの大翔さんの形相に、サラリーマンもちょっと恐れをなした様子だった。

「なんなんだよ、あんた!」

その時大翔さんがサラリーマンの腕を取ると、いきなり腕を本来は曲がらない方向にねじった。

「いてえ!!!」

本気で痛がっているサラリーマン。

だけど大翔さんはそれでも腕を離そうとはしない。

「わかった、わかったよ！返すよ、こんな女！！」

サラリーマンが痛さのあまりにそう叫ぶと、大翔さんが黙って腕を離した。

「何なんだよ！ばかやろう！！」

サラリーマンはそう言つと、腕をさすりながらすごいスピードで駅の方へ走り去った。

さよならの決意 4

駅から少し離れた人通りの少ない道路に私と大翔さんは2人残された。

冷たい風が吹きぬけていく。

大翔さんが怒った顔で、私をまっすぐに見つめている。その視線に耐え切れなくて、私はうつむいた。

「空良ちゃん、どういうこと・・・？いきなり荷物まとめて出てって・・・心配したんだぞ。何か理由があるんじゃないの？説明してよ」

「・・・・・・・・」

「空良ちゃん！！説明しろ！！」

怒りを我慢できなくなったのか大翔さんが怒鳴った。体がびくつと震えた。

私はおそるおそるうつむいていた顔を上げた。

「今日夕方うちに真帆さんが来たの」

「・・・え？」

「それで大翔さんの過去を全部聞いた。医者だったときのこととか・

・・」

大翔さんは怒りも忘れて、驚いている様子だった。

「DVを受けた政治家の息子の奥さんの話も聞いたよ。大翔さんが医者を辞めても仕方ないと思った」

「そつか・・・」

「でも真帆さん言ってたよ。大翔さんは医者の才能があるって。大翔さんの治療でたくさんの方が助かるって」

「・・・・・・」

「私もそれなら大翔さんは医者を続けた方がいいんじゃないかって思った・・・」

大翔さんはうつむいていた顔を上げた。

その顔は怒ってるような、泣きそうな、苦しみに満ちた顔だった。

「何にも知らないくせに勝手な事言っくなよ！！俺だってすごく悩んで決めたんだ！今だって医者の中の夢を見る。俺は今もずっと迷ってて、前に進めてないんだよ！！」

「そつだよ！どうせ私は何も知らないよ！どうせ関係ない部外者だもん！！大学病院に勤めてた事だって知らなかったよ！！どうせ部

外者だから、私に何も話してくれなかったんでしょ??」

私も感情を止められなかった。

言葉が止まらない。

考えるより先に口からどんどん言葉が流れ出て行く。

「大翔さんは私をDVの政治家の息子妻さんに重ねてみてただよ！だから私の事を守ってくれても、自分の事は全部一人で抱えて、私には少しも背負わせてくれなかったじゃない!!」

「空良ちゃん、それは違う・・・」

「違くない!!!」

大翔さんの言葉をさえぎって、私は自分の感情を大翔さんにぶつけ続ける。

「・・・私に同情してるだけなんでしょ?両親から虐待受けて、彼氏からDVされて・・・かわいそうだよねって・・・」

気づくと、私の目からボロボロ涙がこぼれてきていた。

感情と一緒に涙も止まらない。

私はその涙を袖でゴシゴシぬぐった。

大翔さんは黙って、私の感情をぶつけられていた。顔はうつむいてて見えない。でも怒っているんだろうとは思う。

「でも、私はもうDV彼氏から逃げられた。以前よりは元気になったと思う。だからもう大翔さんの所にいる理由がないじゃない・・・私は大翔さんには何の関係もない人間なんだし。私は大翔さんに支えてもらえばっかりで支えられないもん・・・」

声がしゃくりあげてしまつて、うまくしゃべれない。両袖でゴシゴシ涙をぬぐつても次々に涙は出てくる。

そんな自分が情けなくて仕方ない。

大翔さんにやつ当たりみたいに感情をぶつけて、私は小さい子供といつしよだ。

さつきより風が強くなつてきた。

強い風が私と大翔さんに思いつきり吹き付ける。

大翔さんはふつと息をつく。

表情はすっかり落ち着きを取り戻したようだ。

「空良ちゃん」

「・・・」

「俺言つたよね。俺が兄貴になつてやるって。俺ずっと空良ちゃんを妹として守ってあげたらと思つてたよ」

「でも私は妹じゃないじゃん!!」

私は大翔さんの顔を見据えた。

妹、妹・・・ってもう止めてよ!

この言葉が世界一嫌いになりそうだった。

「空良ちゃん・・・俺の事が嫌い・・・?」

「そうじゃないよ!妹が嫌なの!!妹みたいに守ってもらっただけ・・・そんなの嫌なの!!」

真帆さんみたいな人だったら大翔さんも頼るし、好きになるんですよ?

妹なんて嫌!妹なんて言わないで!私を妹として見ないでよ!!」

もう絶叫に近かった。

私は子供みたいにワアワア声を出して泣いた。

さよならの決意5

随分長い間、2人とも何もしゃべらなかった。

私はひたすら泣きじゃくってるだけだったし、大翔さんはうつむいたままだった。

だけど顔は真剣そのもので、私はたぶん泣きやんでも大翔さんに何も言えないだろうと思うくらいの迫力だった。

うざいんだろうな・・・

わかっているんだ、本当は。

部外者に口を出されて、しかも親切にお兄ちゃんになって守ってあげる・・・なんて言ったら、「妹じゃない」って怒鳴られて、大翔さんじゃなくても誰だっとうんざりするだろう。

私もたぶんうんざりする。

今自分でもうんざりしてるくらいだから・・・

そう考えたら又悲しくなって、止まりかけていた涙が又目からボロボロこぼれる。

「空良ちゃん」

「・・・・・・」

「空良ちゃんがそんな嫌なら、俺はお兄ちゃんはやめるよ」

大翔さんが予告なく発した一言に、一瞬時が止まった。
私は泣くことも忘れて、しばし呆然とした。

最悪な結末。

嫌われた・・・

もう側にもいられなくなる。

妹でも側にいられば良かったのに・・・

バカだ、私・・・

私を取り巻く世界が、モノクロの世界のように色がなくなっていく。
・
・

さよならの決意6（前書き）

さよならの決意 6

その時、ふわつとした温かくて心地よいものが私の身体を包んだ。

「え．．．」

その温かいぬくもりが大翔さんだと私はしばらく気づかなかった。
私は思いつきり大翔さんに抱きしめられていた――

何でいきなり大翔さんに抱きしめられているのだろう。

状況が全く把握できない。

夢でも見てるんだろうか。

こないだ夢なら大歓迎なのだけど。

私はぬくもりが消えないように目を閉じた。

「空良ちゃん．．．、俺は前から空良ちゃんの事を妹としてなんて見てないよ」

強く私を抱きしめながら大翔さんがつぶやくように言った。

“え．．．嘘．．．”

展開の早さに全くついていけない。

「なんで？」

もはや夢と現実の区別がなくなつた私はそれしか言葉が出なかつた。

「なんでつて・・・俺は空良ちゃんが妹としてじゃなく、女として好きだから・・・」

「嘘！」

「嘘じゃないよ。たぶんチャットで見かけたときから、空良ちゃんの事が好きだつたんだと思う」

大翔さんは私を抱きしめる腕に力をこめた。

「俺、必死に我慢したんだよ。必死に気持ち抑えようって・・・兄貴じゃ我慢できないのは俺の方だつていうの！」

「嘘・・・」

「この期に及んで嘘言つてどうするの！空良ちゃんがあんな事言うから、俺の結界破れちゃったじゃん」

私は大翔さんの身体を両手でぐつと押しやった。

大翔さんがビクリした顔で私を見る。

私は大翔さんの顔を見据えた。

ごまかされてる、嘘をつかれてる、そう思った。

「嘘！絶対嘘だ！！だって、私にいろいろ過去とか話してくれなかった・・・」

「嘘じゃないって！！だいたい言えるわけないよ。絶対空良ちゃん、誤解すると思ったし。それに空良ちゃんはDVとかで傷ついてると思ったから、俺の過去とか話して、空良ちゃんに重荷を背負わせたくなかったんだよ」

大翔さんは恥ずかしそうに言った。
顔は真っ赤に染まっている。

大翔さんの優しさや気遣いは痛いほどにわかった。
だけど私はやっぱり寂しかった。

「私は大翔さんの過去とかつらいこと聞きたいよ！好きな人の重荷は背負いたいもん！」

又、涙がボロボロ出てくる。

大翔さんに私を頼って欲しかった。
私を必要として欲しかった。

さよならの決意 7

「ごめん・・・」

再び大翔さんに抱きしめられる。
とてもとても温かい。

私はその温かさに気絶しそうになる。

「空良、好き」

大翔さんが腕に力をこめて、私の耳元でつぶやくように言った。
嘘じゃないのか、
夢じゃないのか・・・

大翔さんが私の事を好きだなんて。

本当か自分の頬をつねりたい。
ちゃんと本当か確認したくなる。

だけど私の目からはどんどん勝手に涙があふれてきて、涙のぬくも
りを頬に感じて、やっぱりこれは夢じゃないんだって実感した。

「空良、泣かないで」

大翔さんが涙を指でぬぐってくれる。

でもそれに追いつかないくらいどんどん涙はあふれてくる。

「追いつかないや」

そう言つて、大翔さんは私の涙にそつと口をつける。

大好き、大翔さん。
本当に嘘じゃないよね。

「しよっぱい・・・」

そう言つて笑う大翔さん。

そんな大翔さんを見て、私もつられて笑う。

「空良、ずっと俺の側にいて・・・」

そしてそつと私の唇に大翔さんの唇が重なった。

“温かい・・・”

大翔さんの唇は少しガサガサしてたけど、すごく温かった。
唇から大翔さんの『好き』という気持ちがどんどん伝わってくるよ
うだった。

私の『好き』っていう気持ちも大翔さんに伝わったかな・・・

唇を離した大翔さんは笑っていた。
私も笑った。

もう妹じゃないんだよね？
私をちゃんと女として見てくれるんだね。
側にいてもいいんだね。

もう涙が止まらないくらい嬉しい。

大翔さん、大好き、大好き。
もう何回言っても足りないくらいだ。

大翔さんの過去もつらいこともみんな私に半分背負わせて欲しい。
私を頼って欲しい。
私を必要として欲しいよ。

「空良・・・」

どれくらい抱き合っていたのか――
1時間だろうか、2時間？

何時間でもずっと大翔さんとは抱き合っていたい・・・
大翔さんの身体と一体になって溶けてしまいたいくらいの気持ちだった。

身体も心も今まで経験した事がないくらいホカホカ温かった。

「もう寒いし、帰るか。風邪ひいちゃうもんな」

そう言つて大翔さんは私の身体をそつと離れた。
正直すごく寂しい。

「俺たちの家に帰ろう」

私は顔を上げた。

大翔さんは満面の笑みで私を見ていた。

「うん!!」

私は力強くうなずいた。

大翔さんが私の手を優しく握る。

だけど握られたその手に何か違和感を感じた。

大翔さんの手の中に何かが握られている。

不思議そうな顔をする私に大翔さんが自分の手の中を開いて見せてくれる。

その手の中には、遊園地で大翔さんがくれた天使の人形があつた。

出て行く時に机に置いてきたあの人形だ。

私は嬉しくてその人形を手のひらに包んで頬擦りした。

「もう置いて行ったらダメだよ」

大翔さんが笑ってそう言くと、私の手を再び握った。

過去との決別 1

「ん・・・・・・・・」

私はゆっくりと眠りから覚醒した。
目を開けると、いつもの白い天井。
ガバッと起き上がる。

そこは私がいつも寝起きしていた大翔さんのベッド。

“ そうだ、大翔さんのうちに戻ってきたんだ ”

横を見ると、大翔さんが安心したように眠っている。
その寝顔を見て、私は思わず顔がほころんでしまう。
いつもは一人で寝ていたこのベッドの隣に大翔さんがいる。

この家に帰ってきた大翔さんと私は初めてこのベッドで一つに結ばれたんだ――

「うう・・・・」

私が起きた気配を察したのか、大翔さんが目を覚ました。
寝ぼけ眼で大翔さんはゆっくりと上体を起こす。
そして私の方を見ると微笑む。

「空良、起きてたの？」

「ううん。今起きたとこ」

「今何時かな？」

私は枕もとの時計を見る。

「まだ朝の4時」

「ええ！まだそんなに早い時間か。もっと寝てたと思った」

そう言つて大あくびをする大翔さん。

寝起きの大翔さんはとても子供っぽくて、かわいく感じた。

「なんか夢みたいだな」

大翔さんが私を見て、しみじみといった感じで言う。

「うん、私もそう思つてた」

「空良と一緒にいられて、しかもこのベッドで一緒に寝ることができて、俺本当に今夢かと思つた」

「うん・・・」

大翔さんは私を抱きしめた。
優しくて温かい・・・

今まで私に触れる男の身体は・・・、
私を強引に組み敷く義父の重い腕、
援助交際で私にのしかかる重い体、
私を思いつきり殴るタ力の痛い腕。

そんな物にしか私は触れられなかった。

私にこんな温かい・・・、そして優しく触れる男の人がいたんだね。
夢みたいだ。

過去との決別2

私の唇に大翔さんの唇が重なる。
思わず吐息が漏れてしまう。

「空良ちゃん、まだ眠い？」

唇を離れた大翔さんが聞いてくる。
私はゆっくり横に首をふった。

「ごめん、俺我慢できない。抱きたい。何度だって空良ちゃんが欲しくなる」

大翔さんがゆっくりと私の身体に重なってきた。
私は微笑んだ。
私も同じ気持ちだった。
何度だって大翔さんと一つになりたい。

大翔が私に触れる手はとても優しい。
私の汚れた体を浄化してくれるような気がした。
何度だって抱かれたい。

私の体中に優しく口づける大翔さん。
その唇が私の敏感な所にじらすように触れた時、私は思わず声を漏らした。

「気持ちいい・・・？」

「・・・うん」

「怖かったり、嫌だったりしない？」

「しない・・・」

「またね、空良ちゃんがいなくなるんじゃないか・・・って不安になるんだよ」

「いなくなるないよ」

「約束だよ」

「うん・・・」

私はゆっくりと快感に身をゆだねた。

過去との決別3

「ごめん・・・」

コトが済んだ後、下着をつけている私に、大翔さんは気まずそうに言うてくる。

その顔は真っ赤に染まっている。

「どうしたの？何であやまるの？」

「だって俺、性欲大魔王みたいじゃない？嫌じゃなかった？」

「ううん、そんなことないよ」

そんな事を気にする大翔さんをかわいく感じた。
そして私に気を使ってくれてるんだろ？なあ…とも思う。

大翔さんは私に腕枕をすると一息つく。

私は大翔さんの腕の中にすっぽりくるまれて、安心感に満たされた。

「空良」

「ん？」

「俺の過去の話をしているのかな？」

「え・・・」

「ビックリしちゃったよね。いきなりでさ。でも空良にちゃんと俺の過去、真帆の事を含めて話したいと思ったんだ、知って欲しいと思ったんだ。いいかな・・・？」

大翔さんが私の目をまっすぐに見据えた。

その目はすごく真剣で、私は少し戸惑う。

だけど私は大きくうなずいた。

大翔さんが安心したように少し笑う。

「俺は、両親っていう存在をあまりよく覚えていないんだ」

「え・・・どういうこと？」

「俺の両親、俺が3歳の時に交通事故で亡くなったんだよ。俺が物心つくか、つかないかの時期だったから、あまり両親っていう存在をあまり感じられなくて・・・」

「ごめんなさい・・・こんなこと聞いて・・・」

「空良ちゃんが謝る事じゃないよ。それに俺が話し出したんだからさ。それでね、両親を一度に失った俺は子供がいなかった父方の叔母夫婦に引き取られたんだ。叔母夫婦は子供が欲しくてできないってわけじゃなくて、2人とも子供が嫌いだったみたい。だから俺を引き取るのも嫌だったみたいなんだ」

たった3歳で一度に両親を失い、自分を引き取るのを嫌がった叔母夫婦の所に行くしかなかった3歳の大翔さんの気持ちを考えると、胸が苦しくなる。

寂しかっただろうし、心細かっただろう。

「叔母たちは俺に無関心だったし、明らかに迷惑そうだった。すごく居心地が悪かった。だけどそんな状況は俺が小学校に入ってから変わり始めてきたんだ。叔母夫婦は自分たちも学歴が高かったせいもあるんだろうけど、俺が学校でいい成績を取るとすごくうれしうだった。有名大学の付属狙えると言われたんだ。すごく褒めてくれたしね。ご褒美もすごかったよ」

何だかすごく心が寂しくなる家族だな。
うちなんてもっとひどいけど・・・

「俺が生きていくためにはいい成績を取らなくてはいけない・・・
と何となく悟ってさ、学生時代は死に物狂いで勉強したよ」

大翔さんの気持ちは何となくわかる。

私は切なくなっで、大翔さんの腕にぎゅっとしがみついた。

「そして俺は大学の医学部に入ったんだ。もう医者になろうと決めてた。人を助けたいとかそういう理由じゃなかった。ステイタスみたいなもので選んだんだ」

自虐的に大翔さんが笑った。

「医学部に入ってから俺は上に上がる事しか考えてなかった。もう何の為に上に上がるかなんて考えてなかった。もう俺の生きる目標というか、生きる為に上に上がろうとしてたんだよ」

「上に上がる・・・？」

「うん。俺は日本の最高峰と言われる京凜大学病院の教授になることしか考えてなかった」

大翔さんはうつむくと、ここで言葉を止めた。
続きを話すのを迷っているかのようにだった。

でも大翔さんは何かを覚悟したように、話を再開した。

「その時大学の悪友から、大学内に京凜大学病院の教授の娘がいるって聞いたんだ。俺はその娘に近づいた。その娘の彼氏に・・・というか、婿になれば、教授の道は近くなると思ったんだ」

「・・・・・・・・・・！」

大翔さんはゆっくりと私の方を見た。

「それが真帆だったんだ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3229j/>

画面の中を漂う天使

2010年10月10日19時00分発行